

けものフレンズR いつかどこかのロージエツト

雀居

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

※けものフレンズの二次創作「けものフレンズR」をもとにした三次創作です。

※けものフレンズIP、関連ゲーム、放送されたアニメ作品を傷つける意図はありません。実在する全てと関係がありません。ご了承ください。

※けものフレンズRの元ネタ様です。本当に感謝しています。素晴らしい発想をありがとうございました。

<http://seiga.nicovideo.jp/seiga/im9099194>

## 【あらすじ】

見知らぬ場所で目が覚めた子供は、セルリアンに襲われたところをフレンズに救われる。

名前を聞かれたところで自分が記憶喪失になっていることに気づき、スケッチブックに残された文字から「ともえ」と名乗ることに。「ヒトをずっと待っていた」というイエイヌと一緒にパーク内を巡り、「お父さん」「お母さん」を探す旅に出るが、その道のりは思っていたよりも簡単なものではなかった。

ヒトとフレンズとパーク内ロボットが巡る旅を描きます。

これは、いつかどこかの薔薇色の日々に至る物語。

※全12話を予定。不定期連載。

※アプリ版、アニメ版とも違うオリジナルストーリーになります

※できるだけアニメ版などのお約束を踏襲したいと思っていますが、技量と知識が足りず不十分なものとなります。ご了承ください

※SFものになりますが、S(すっごい)F(フィクション)小説なので何も信じないでください

19/04/23:いただいた感想を参考に、段落や台詞ごとに行間を一つ開けました。読みやすくなっていたら幸いです。ご指摘ありがとうございます!

19/04/30:いただいた感想を参考に、タイトルを変更しました。ありがとうございます!三話更新はしばらくお待ちします、すみません

19/05/03:第一話本文について「センザンコウ」から「オセンザンコウ」へと修正しました。大変失礼いたしました。ごめんなさいセンちゃん。ご指摘ありがとうございます。

19/05/09:イエイヌちゃんは夜行性ですので台詞を一部修正しました。大変失礼しました。ごめんなさいイエイヌちゃん。

目次

第一話	R e v e i l l e	1
第二話	R i d e	38
第三話	R o o t	67

## 第一話 Reveil

カシャン、という音の後に、風が吹き込んできた。鼻先が冷えた気がして、ゆつくり目を開ける。最初に視界に飛び込んできたのは、見慣れない天井だった。汚れて、古ぼけている。

(……あれ？ あたし……？)

ずっと眠っていたせいかわ、頭がぼんやりしていた。横になつたまま周囲を見たが、見覚えがない。四角い機械がたくさん並んでいて、冷たくて、静かな部屋だった。どうしてこんなところで眠っているのだろうか。

起き上がって、まず自分が寝ているものの感触に驚いた。ベッドの中には、虹色に光る四角いものが詰め込まれている。ぷにぷにとしていて柔らかくて、温かい。

「これ、なんだろう……あつたかい……」

布団も何も無い、ただ服のまま眠っていたのに寒くなかつたのは、これのおかげみたいだ。しばらくその温かい四角形を触っていたけれど、ふと風が冷たく感じて辺りを見回した。ガラスが破れて、窓から風が吹き込んでいるのだ。天井も崩れて、隙間から青い空が見える。

「……………」

眩いでも自分の声が響くばかりだ。隙間風や木々の揺れる音が急に気になって、ベッドから出た。ベッドだと思っていたものも、卵を横にしたような、不思議な形をしている。触ってみるが、金属製で硬い。起きる寸前に聞いた「カシャン」という音は、もしかしてこのベッドの蓋が開いた音だったのだろうか。そもそも、ベッドに蓋なんて普通ないけど。

髪の毛を手で直して、髪を結び直した。緩んでいた靴紐も締め直して、改めて自分の格好を確認する。お気に入りの青いベストと灰色のショートパンツ、たくさん歩くからと買ってもらった茶色のブーツ。そういえば、とベッドを振り返り、自分の頭を触ったけれど、い

つもかぶっていた帽子がなかった。

「おかしいな……どこかに置いてきちやったのかな」

部屋を見回してみたけれど、全部風や雨で吹き飛ばされてしまったのだらうか、何も残っていないかった。紙はぼろぼろで、木の椅子も腐っている。金属や石のものだけ、無事だったみたいだ。

「……あの、だれかー？ いませんかー……？」

声をかけてみたけれど、返事はない。まだ眠気の残る目をこすつて、ふと自分の手に目が留まった。

爪が青くなっている。なんだろう、とこすつてみたけれど、取れなかった。

何か。何かがおかしい。

急に不安になって、部屋の扉に向かった。ドアノブを捻ると、ギギギ、と軋んだ音を立てて開いた。同時に目の前が明るくなり、思わず手をかざす。

そこは、建物に囲まれた中庭だった。背の低い草が生えている中から、たくさん木の樹が枝を伸ばして、色んな花が咲いている。天井はガラスだったみたいだけれど、それも破れてぼろぼろになっていた。庭に面した廊下の柱もぼろぼろで、床にはたくさんヒビが入っている。

「あのー！ すみませーん！」

口に手を添えて精一杯の声を出したけれど、返事はなかった。もしかししたら、他にも眠っている人はいるかもしれない。見つけた階段を上がり、古い廊下を歩き、開く扉は全部開けてみたけれど、自分以外に人の姿はなかった。一番上の部屋まで来る頃には、もうすっかり息が上がって、太腿がぱんぱんになってしまった。

「ほ……ほんとに、誰もいないの……？」

壊れた窓から外を見ると、この建物が森に囲まれていることが分かった。その森の向こうに、何か丸いものが集まっているのが見える。石造りのドームがたくさん並んでいるのだ。

「あれ、建物だよね……？ あっちに行ったら、誰かいるかな……」

少し悩んだけれど、「よし！」と思い切つて建物から出た。ぼろぼろで、暗くて、しんみりとした建物よりは、明るい森の方が楽しそうだ。

中庭から続く石畳を歩いて、一番大きな扉を開ける。眩しくて、一瞬目がくらんだ。

温かい日差し。青い葉と土の柔らかいにおい。視界が光に慣れると、目の前には森が広がっていた。

「わ、あ……」

日差しは柔らかく、葉が擦れて穏やかに音を立てていた。広がる開放感に、うーんと伸びをする。肺いっぱい空気を感じ込むと、なんだか気分が軽くなる気がした。暗い部屋にいたから、不安になっただけみたいだ。

「えーと、さっきの窓があそこにあるから……丸い建物は向こう、かな？ よーし」

気分は探検隊だ。不安から逃げて、期待に飛び込むようにして、森の中に続く小道に駆け出した。

森は穏やかで、どこかから鳥の鳴く声も聞こえてきた。木漏れ日が風に揺れて、きらきらとして見える。自然にできた緑のアーチをくぐって、ふと自分の手を見ると、光の加減で爪が青や緑に変わって見えた。不思議な色をしている。最初は変に思えたけれど、こうして見ると綺麗かもしれない。

「……でも、なんで取れないんだろう。水で洗わなきゃだめとか……？」

うーん、と眺めながら指でこすってみるけれど、指先が温かくなっただけだった。建物を探すより水を探す方が先だろうか。

鼻歌混じりに歩いていると、突然茂みがガサガサと音を立てた。

「わっ、なに……っ？」

驚いて足を止めてしまうと、急に女の子が飛び出してきた。「よよよよよ！」と真っ青な顔で走ってきた女の子は後ろを向いていて、目が合った時にはぶつかってしまふ。

「わあああー！」

「ひよわああー！」

「ごちつとぶつかった肘やお腹はやけに硬くて痛い。ぶつかるまま、二人して尻もちをついてしまった。」

「いてて……」

「ご、ごめんよー！ 大丈夫？ ついこの間も前向いて走りなさいってセンちゃんに言われたのに私ったらー！ ごめんねごめんね、立てる？ 平気？」

「だ、大丈夫！ あたしこそごめんね、びつくりしちゃって」

元気な女の子に手を引っ張られるまま立ち上がった。長い黒髪に、茶色のベストとクリーム色のスカート。肩や肘、お腹にもプロテクターを着けている。帽子の端からは先だけ尖った丸い耳、スカートの裾から硬そうな尻尾が覗いていた。

「……あれ？ あれ？ 耳と、尻尾？」

「え？ 珍しいかな？ そんなに見られると照れちゃう……ってためだめ、早く逃げなきゃ！ あなたはー、うーん、戦うの得意？」

「戦う?! に、苦手かも」

「私もー！ 守りは完璧なんだけど戦うってなるとどうしても苦手っていうか、あつホントにやばい逃げよ逃げよ！ 得意じゃないなら逃げるが勝ち！」

「え?! 逃げる?! 何?!」

「早く早く！」

手を取られるまま、急いで走り出した。森の先へと走ることにになり、慌てて尋ねる。

「ね、ねえ、何から逃げてるの?!」

「セルリアンだよ！ センちゃんがいたらコンビで倒せるけど、私一人じゃ厳しいからさー！ もうタイミング悪いよねー！ あー、私、オオアルマジロのオルマー！ あなたは何のフレンズなの？」

「えっ、あたし、あたしは——」

セルリアン？ オオアルマジロ？ 目を回している間に、ふと頭上で大きく枝が揺れた。オオアルマジロが急に止まり、背中にぶつかってしまふ。謝ろうとする前に、目の前が急に暗くなった。えっと視線を上げようとしたのも束の間、道を塞ぐようにして巨大なものが降ってくる。着地で地面が揺れた。

丸くて、透き通った青い体は、向こう側が見えないほど大きかった。



ハサミみたいなものが付いた紐がによるよると二本伸びている。その中央には、丸い一つ目だけがあった。ぎよろりとこちらを見下ろしてくる。

「な……な、な……」

「あちゃー、追いつかれちゃった……。うー、センちゃん早く来てー！頼むよー！ あなたは、後ろにいてね！ そしたら大丈夫だから！」

「……は、……は……っ」

大きな口も、牙もない。怖い顔をしているわけでもない。なのに、全身が震えていた。膝ががくがくして、立ってられない。その場へへたり込んでしまっても、オオアルマジロは「おっ小さくなるのは防衛の基本！ いいね！」と笑っていた。どうして笑っているんだろう。こんなに。

こんなに。

視界にノイズが走る。

何かもつと大きな影が目の前に重なった。

そうだ。知っている。あたしは、この感覚を知っている。全身が震えるぐらいの、恐怖を。

「オ、オルマーちゃん、逃げなきゃ、早く」

「いやーここまで近づかれちゃうと逃げるのも厳しいよお。時間稼ぎするぐらい、かなー！」

そう言いながら、オオアルマジロは突っ込んできたハサミを、腕を交差して防ぐ。オオアルマジロは少し踵を地面に擦らせただけで、あまり効いていないみたいだ。

「うー、力は強くないけど大きいなあ。石どこだろう」

「いしっ？」

「セルリアンはねえ、こんなに大きい奴でも石があるからどうにかなるのさー！ 石を見つけたらね！ よつとー！」

オオアルマジロはまたハサミを払いのけたが、苦笑して振り返った。

「まあ、防戦一方だと厳しんだけどねー、あはは……」

「——まったく」

急に別の声が降ってきた。思わず顔を上げると背後に誰かが降り立つ。後ろからこっさり近づいていたハサミを、棘のような鱗で作られたスカートが弾き飛ばした。

「油断禁物ですよ、オルマー」

「センちゃん！ あーよかったあ来てくれて！」

「だめですよ。一人で走って、他のコまで巻き込んで」

「よ、よよよ……ごめんなさい……」

センちゃん、と呼ばれた女の子は、ピンクのベストを軽く上下させて「本当にもう」と呆れ顔をした。スカート、拳、帽子は、全部棘状の鱗を繋げたようになっていて、やつぱり帽子とスカートからは耳と尻尾が覗いていた。「センちゃん」はオオアルマジロと並んで立つと「イエイヌさん！」と声を上げる。

瞬間、セルリアンと呼ばれた怪物が大きく仰け反った。そのまま、ばかーんと小さなキューブになって弾け飛んでしまう。キューブはそのままきらきらと輝いて、風に飛ばされていった。

「……た、助かった……？」

「大丈夫ですか？ 大変でしたね」

「センちゃんのおかげで助かったよー！ あなたも、怪我はない？ なさそうだね！ あーよかった！」

「オルマー？」

「ご、ごめんなさいい気を付けます……」

「……結果的に、このコが助かってよかったです。だからこれで、以上です」

「センちゃん！」

ぱあつと顔を輝かせるオオアルマジロに向かって溜息を吐いたが、「センちゃん」はこちらに向かって柔らかに微笑んだ。

「本当によかった。私はオオセンザンコウです。それで、こっちが……」

オオセンザンコウが振り返った先には、また別の女の子が立っていた。もこもことしたグレーの髪は、顔周りだけ白く内側に丸まり、グ

レーの上着とスカートの下は、白いニットと手袋だ。この子には、尖った耳とふさふさとした尻尾がある。その子は両手を合わせてこちらを見ると、ぱあつと顔を輝かせ、猛烈な勢いで飛びかかってきた。「会いたかった~~~~!!」

「ええええ?!」

座り込んだままだったから、思い切り飛びつかれて二人して倒れてしまった。もふもふとした髪や服が温かい。彼女はすりすり頬ずりして、嬉しそうに言った。

「はあ~~~~! 懐かしいなあこの匂い! この目をどれだけ待ったことか……っ!」

「わ、わわ、あれ、あれえ……?」

もももことした柔らかいものに包まれて、なぜか緊張が解けていく。この、ほっとする感覚。何だろう。懐かしい。柔らかくて、温かくて。

「イエイヌさん。そのコ、困っちゃってますよ」

「まあ、嬉しいのはわかるけどさー!」

「はっ! すみません、私、すごく嬉しくて……、あれ?」

目の前にいる三人が驚いた顔をする。どうしたんだろう、と不思議に思った途端、頬を冷たいものが滑り落ちた。ぽろぽろと、後からこぼれ落ちてくる。三人がわたわたと慌てた声を上げた。

「ど、どうしたんですか、どこか痛いですか?」

「ごめんなさい~~~~私が飛びついちゃったから~~~~!!」

「もしかして、さっきの戦いで怪我しちゃった?! うわ~~~~んどうしようセンちゃんどうしよう!!」

「ご、ごめんなさい! 大丈夫! あたし、あの……なんか、ほっとしちゃって……」

慌てて目元を拭くと、三人も「よかった」と表情を緩めた。

「セルリアンに遭うの、初めてみたいだもんね。怖いよねー、あれ。怪我がなくてよかったー」

「そういえば、あなた……耳も、尻尾もない。羽などもないですね。珍しいフレンズさんです」

「ヒトに間違いありませんよ！ 匂いで分かります！」  
にここにこと、イエイヌと呼ばれた子が笑う。

「ヒト？」

「はい！ 私はいエイヌ。ヒトが来るのを、ずーっと待つてたんです！」

尻尾を元気に揺らして、イエイヌが答えた。少し引つかかって、思わず尋ねる。

「あの、あたし、ヒトはヒトだと思うんだけど……フレンズって、なに？」

オオアルマジロとオオセンザンコウはきよとんとした顔で応じたが、すぐに笑って答えた。

「そっか、起きたばっかりだと困っちゃうよね！ えっと、動物にサンドスターがぼこって当たると、今の私たちみたいな姿になるのさー。そういうコたちは、ジャパリパークではフレンズって呼ばれてるんだよー！」

「そして、あなたはヒト、です。イエイヌさんの鼻に間違いはないでしょう。フレンズ、かどうかは分かりませんが、ヒトであることは確かです」

「じゃあこの場合、ヒトちゃん？ になるのかな？」

「いいえ、ヒトはそれぞれ、『おなまえ』があるはずですよ！」

イエイヌが言うと、オオアルマジロは「そうなんだ！」と笑顔になった。イエイヌがこちらの両手を取って言う。

「あなたの『おなまえ』は、何というんですか？」

「あたしは……、あれ？ あたし……あたし、は……」

尋ねられ、すぐに答えようとしたはずなのに、口から出てこなかった。頭の中にもやががかかったみたいだ、思い出せない。あれ、おかしいな、と考え込んでしまうと、イエイヌが心配そうな顔で首を傾げた。「どうしました？」

「……ごめん、名前……思い出せないの」

「ええっ」

「どうしてだろう……眠って、目が覚めたのは確かだと思っただけど

……」

何度首をひねっても、自分のことなのに思い出せなかった。何か怖いことがあって、その後何かがあって、眠りについた。そして、目が覚めた。眠りにつく前のことが、霧の向こうに消えていく。どうしてだろう。とても大切なことを忘れている。

「はい！ 提案なんだけど！」

急にオオアルマジロが声を上げ、驚いて顔を上げた。オオアルマジロは胸を張って言う。

「こういう時は、『始まりに戻る』が大事だと思うんだよね！ 物探しは、まずなくなつたと気付いたところに戻るところから始めるし、思い出せるところまで戻ってから考えてみるってどうかな？」

「……そうですね。困った時は基本に忠実に。先生も言っていましたし」

「なるほど！ じゃあ、あなたは、どこから来たんですか？」

振り返ったイエイヌに笑顔で尋ねられ、反射的に来た道を指差した。

「えっと、あつちにある建物から来たの。ぼろぼろになってるところ」  
素直に答えると、オオセンザンコウは目を丸くした。

「そうなんですか？ 結構探索したと思っていましたけど、見落としていたんでしうか？」

「これは気になるね〜！ 早速行ってみようよ！ ゴー！ ダブルスファイア！」

「あ！ ちよつと、オルマー！ 一人で先に行ったら危ないですよ！」  
すぐさま駆け出してしまったオオアルマジロを、オオセンザンコウが慌てて追いかけていく。ぽかんと見送っていると、イエイヌがくすくすと笑った。

「私たちも行きましょうか」

「そうだね。さつきは助けてくれてありがとう、イエイヌちゃん」

「いえ！ ヒトを守るのが、私の使命ですから！」

イエイヌはきりつとした顔で言うと、すぐに笑った。手を取られ、立ち上がる。

セルリアンを警戒しながら最初の建物まで戻ると、オオセンザンコウが「ふむ」と建物を見上げた。

「ここ、ですか」

「そう。この建物の中で目が覚めたんだ」

「……壊れちやうとかないよね?」

オオアルマジロは少し不安そうにしたが、くんくんと鼻を鳴らしたイエイヌは迷わず扉を開けた。慌てて追いかけると、イエイヌは何かに引つ張られるようにして歩き始める。

「すごい……イエイヌちゃん、あたしがどこにいたのか分かるの?」

「匂いが残ってますからね。ヒトの匂いがした時はどこからしてるのか分からなくて探しちゃいましたけど、一度会えるとしつかり分かります!」

ふんす、と胸を張るイエイヌは得意げで、「ほへー」とオオアルマジロは声を上げた。

「本当に鼻がいいんだね。イエイヌちゃんの巣からずっと離れてるのに、分かっちゃったんだ!」

「すごいですね。さすがです」

「えへへえ……」

イエイヌは二人に言われ、照れた顔で笑うと、中庭から通路に入っただ。あつという間に出てきた部屋まで戻ってきてしまう。

「ここですか?」

「そうだよ! すごいね、イエイヌちゃん!」

「ふふふ」

「あたし、そんなに変わったにおいがするのかな……」

「いい匂いですよ!」

自分で肩の辺りを嗅いでみたけど、分からなかった。イエイヌの言葉を信じることにして扉を開ける。目が覚めた時と変わらず、静かな部屋だ。ベッドまで行くと、オオセンザンコウが「おお」と声をもらした。

「すごい量のサンドスターですね」

「サンドスター? これが?」

「はい。ここで眠っていたんですか？」

「そう、なんだよね……」

ベッドに詰め込まれたキューブを手を取った。これが、サンドスター。相変わらずぶよぶよとしていて、温かい。なんとなく握ったそれをベッドに戻して、ふとオオアルマジロがしてくれた説明を思い出した。

「あれ？　じゃあ、あたし、フレンズ？　なのかな？」

「そうかも？　ヒトのフレンズって、見た目だと分かんないんだね」

「あ、待ってください」

ふんふんとベッドの周りを嗅いでいたイエイヌが、ベッドの傍にしゃがんだ。

「ここからも同じ匂いがします」

「え、そうなの？」

一緒にしゃがみこんでみると、ベッドには引き出しが付いていた。取っ手に指をかけて引つ張り出すと、オオアルマジロとオオセンザンコウが「おああ」と声を上げる。

「そこ、開くんですね……」

「なんか危ない物入ってない?!　平気?!」

「だ、大丈夫だよ！　えーと、バッグと、あつあたしの帽子だ……よかった……」

安心して引き出しからバッグを取り出し、斜めにかけて。帽子を手にとると、ちゃんと青い羽も付いている。イエイヌがふんふんと鼻を鳴らして笑った。

「どれも、あなたと同じ匂いがしますね」

「イエイヌちゃんがそう言うなら、あたしのに間違いないよね。よかった……大事なものだっただ」

「そうなんですか？」

「うん。……そうだ、お父さんがくれたんだ。これであたしも、パークのお姉さんの仲間入りだねって……」

見習いだから、羽は半分だね。お父さんはそう言って、帽子をくれた。帽子をかぶると、少し大人になった気がして嬉しかったのを覚え

ている。帽子をかぶると、少し安心した。

そういえば。この帽子をもらった時、誰かに「見て見て！」と自慢したような。

「これは何ですか？」

つんつん、とオオセンザンコウにバッグを突かれて、思考は止まった。オオアルマジロも興味津々といった様子で右から左からバッグを観察していた。「ちよつと待ってね」と笑顔で応じてバッグを開ける。

「これ、バッグなの。色んな物を入れられるんだ」

「へ〜！ あ、本当だ。何か入ってる！ 『おなまえ』の手がかりはあるかなあ」

「えつとね……」

バッグから一つずつ取り出していった。まずは分厚い動物図鑑だ。これは、そうだ、お母さんにおねだりして買ってもらってから、ずっと大事にしていた本。次は、画材だ。鉛筆と、消しゴムと、色んな色のペンや色鉛筆、それらをまとめたケースが出てくる。それから、ハンカチやタオル、空っぽの水筒も。最後に引っ張り出したのはスケッチブックだ。

「これで全部ですか？」

「そうみたい。よかった、全部バッグに入れてたんだ……」

スケッチブックを開くと、まだ何の絵も描かれていなかった。これから何を描こうとしていたんだっけ。スケッチブックを閉じて表、裏と確認すると、裏表紙で手が止まる。

「あ、おなまえ……」

「おなまえ？」

水か何かで濡れてしまったのだろうか。裏表紙だけ少しふやけて柔らかくなり、「おなまえ」と書かれた白いところだけ、文字が滲んで消えてしまっていた。残っている文字だけ読み上げる。

「……『ともえ』……？」

ずっと隣で大人しく見ていたイエイヌが、不思議そうな顔で振り向いた。



「うん？ 『おなまえ』、思い出しましたか？」

「あ、ううん。覚えてないけど、ここに『ともえ』って書いてあるから……たぶん、あたしの名前、かな」

「……ともえ、ともえ……あなたは、ともえさん！ ですね！」

イエイヌが表情を明るくして言うのと、オオアルマジロは両手を合わせた。

「よかったー、やっと呼べるね！ トモエちゃん、覚えてたよ！」

「そうですね。呼びやすくていいと思います。トモエさん……と呼んで、大丈夫ですか？」

「あ、うん！ ありがとう。おかげで、ちょっとだけ思い出せたよ。……なんでここで寝てたのかは、思い出せないけど……」

お父さんとお母さんのことを思い出しても、この部屋はやっぱり馴染みがなかった。自分の名前だって「ともえ」という実感が無い。思い出そうと記憶を探っても、どうしても白いもやに手を突っ込んでいくだけで、何も出てこないのだ。うーん、と首を傾げていると、オオセンザンコウが言う。

「ということは、ここはトモエさんのナワバリではないんですね」

「ナワバリ……？ そう、だね。あたし、違うところから来たんだと思う。覚えてないけど……」

「うーん。フレンズになると、動物だった頃のことを忘れちゃうコも多いし、トモエちゃんもそうなのかも？ サンドスターに埋もれて眠ってたんだからさ」

「……そうなの、かな？ それって、思い出せるのかな」

不安になって眩くと、オオアルマジロは難しい顔で首を傾げ、オオセンザンコウも「どうでしょう」と眉根を寄せてしまった。だが、イエイヌは笑って言う。

「大丈夫ですよ、ともえさん！ 今、おとうさん、おかあさん、つて言っただじやないですか。きつとこれから、何か切っ掛けがあったら思い出せますよー！」

「そう……うん、そうだね！ だと思う！ ありがとう、イエイヌちゃん」

「いいえ！ でも、ここがナワバリじゃないなら……一度、私のおうちに来ますか？」

「おうち？」

それって、と尋ねようとしたところで、グウ、と大きな音が上がった。慌ててお腹を押さえると、イエイ又たちが笑う。

「結構動いたし、お腹すいちやうよねー！」

「ご、ごめんなさい……恥ずかしい……」

「大丈夫ですよー！ お腹がすいてるなら、なおさら私のおうちに行きましょう！ ジャパリまんがまだありますからー。二人は、どうしますか？」

イエイ又が明るく言って振り返ると、オオセンザンコウとオオアルマジロは笑顔で首を横に振った。

「私たちは、自分の分がありますから」

「そうそう！ それに、さつきみたいにセルリアンがいなくても限らないしね。二人をイエイ又ちゃんの巣まで送ったら、ちよつとこの辺りを見て回るよ」

「えっ？ 二人だけで、大丈夫……？ さつきみたいに、セルリアン？ が出たら……」

心配になつて思わず口を挟むと、オオアルマジロは「平気平気！」と明るく笑った。

「私たちコンビで動けば大丈夫！ 普段は何でも屋『ダブルスファイア』とか言つてパークをあちこちしてるぐらいだしー！ まあ、さつきはちよつと、ほら、別々だったから苦戦しちやっただけつてことで、えへへ……」

「……油断は大敵です。必ず、一緒に行動しますよ。オルマー」

「はい……あ、そういうわけだから、トモエちゃんも安心してね！

私たちなら大丈夫！」

「そっか、よかつた……」

バッグに持ち物を戻して、古い建物を後にした。幸い、森を抜けるまでにセルリアンに遭うことはなかった。あまり遭いたくないから、ほつとする。あれを見るとどうしても、自分でも不思議なぐらいに大

きな恐怖を感じるのだ。

【例のBGM】

らつきーびーすと（ジャパリまん配給係）

「イエイヌは、食肉目イヌ科の哺乳類だネ。家畜の中でも古い歴史のある動物だヨ。それだけヒトとの付き合いも長いんだネ。群れで生活する動物だから、家庭に入ると飼い主などの家族を自分の群れだと認識し、リーダーに従ったり、外敵から身を守ったりするヨ。縄張り意識の強い動物で、自分の縄張りに入ってきた相手を威嚇・攻撃して追い出すこともあるネ。とても鼻がよくて、湿った鼻で風向きを感じてにおいの方向も分かるんだ。その代わり、明るい場所だと、赤はほとんど見えなくて、青と緑色の混ざった色を見ていると言われているヨ」

イエイヌが案内してくれたのは、森から少し歩いたところにある場所だった。丸くて同じような形の建物がいくつも並んでいる。広場もあって、遊ぶこともできそうだった。

「へえ……ここが、おうち？」

「はい。前はここにもヒトがいたんですけどね。今は、私だけなんです」

「え？ そうなの？」

「私、ずっとここでヒトを待ってて……だから、ともえさんに会えて、とっても嬉しいですよ！」

イエイヌは笑って、「おうち」の方へ歩き出した。でも、ともえはどうしても歩き出せなくて、立ち止まってしまう。イエイヌが不思議そうな顔で振り返った。

「ともえさん？ どうしました？」

「……あたし、自分のこともあんまり覚えてないし、イエイヌちゃんが待ってたヒトじゃないかもしれないのに、いいのかな」

「もちろんですよ〜！」

イエイヌは明るく言つて頷くと、苦笑して肩を縮めた。

「……実は私も、あんまり覚えていないんです。この『おうち』で、大事なヒトを待つていたはずなんですけど、この姿になる前のことはぼんやりしていて。待つていたヒトのことは、あまり思い出せなくて」  
「そうだったんだ……」

「だから、今はヒトに会えただけでとつても嬉しいんです！　ともえさんも、あまり気にしないでください！」

「ええ？　そ、そうかなあ」

「そうです〜」

「……あはは、そっかあ」

イエイヌがにこにこしていると、それでいいような気がした。オオアルマジロが安心した様子で言う。

「じゃあ、お二人さんはごゆっくり！　トモエちゃんは特に目が覚めたばかりだし、戦うのも得意じゃないって言つてたし、イエイヌちゃんと一緒だと安心だと思うんだよねー」

「ですね。私たちはセルリアンが他にいないか見て来ます。トモエさんに関係がありそうな物を見つけたら、ここに持つて来ますね」

「ありがとう！　でも、無理しないでね。気を付けて」

「はーい！」

イエイヌもともえのところまで戻つてくると、オオアルマジロとオオセンザンコウに丁寧に頭を下げた。

「二人とも、ありがとうございました。手伝ってもらつてよかったです」

「いえいえ。また何か困つたことがあれば、言つてくださいね」

「そうそう！　今後もダブルスファイアをよろしく〜！」

オオアルマジロとオオセンザンコウは笑顔で応じると、ともえたちが手を振つて森へと戻つていった。ともえは、イエイヌに「どうぞどうぞ〜」と誘われるまま、一つの建物に入る。

丸い建物の中は、温かい部屋になっていた。丸いテーブルと椅子、大きめのベッド、クローゼットと、多くの家具がある。イエイヌが一

人で暮らすには、広い家だった。

「わあ、広いね」

「はい。私が動物だった頃は、このおうちにもヒトがたくさんいたんですよ。……ともえさんは、何か思い出しますか？」

「うーん……ごめんね、思い出せないや……。そのヒトたちの物って、何か残ってるかな」

「それが、あんまり。私が動物だった頃に遊んでたオモチヤとか、お皿とかはあるんですけど……あ、でも！ おうちにある物でヒトが何をしていたのか探ってたら、オチャを作れるようになったんです！」

「お茶？」

「はい〜！ 葉っぱをお湯であつたためると、オチャになるって先生が教えてくれて。よかつたら、飲みますか？ ジャパリまんと一緒に！」

「うん！ 飲んでみたい！」

イエイヌがお茶とジャパリまんを用意してくれると言うから、ともえは洗面台を借りた。手を洗いながらふと顔を上げると、鏡に映った自分の顔に気付く。水を止めたともえは、「あれ？」と呟いた。

瞳が、片方は青に、片方は赤に、色が異なっている。

「……あたし、こんな目してたっけ……」

何度瞬きしても、下瞼を軽く引つ張つてみても、目の錯覚などではなく、瞳の色は左右で異なっていた。おかしいな、と記憶を探るが、本来はどちらの色だったのか覚えていない。爪の青と一緒に、瞳も色が変わっているのだろうか。ともえは首を傾げたが、廊下から声が聞こえてくる。

「ともえさーん！ オチャができましたよ〜！」

「あ、はい！ 今行くね！」

ともえはハンカチで手を拭き、慌てて部屋に戻った。バッグと帽子を隅に置くと、イエイヌがテーブルの傍で立って待っている。テーブルには、パステルカラーのおまんじゅうと、透き通った赤色のお茶が並んでいた。

「わあ、これがジャパリまんとお茶？」

「はい！ どうぞ、召し上がれ」

「ありがとうございます！ いただきます！」

二人で向かい合うように座って、ジャパリまんを食べた。野菜のよ  
うな、少し甘いような、不思議な味がする。食べた部分を見たが、中  
身は分からなかった。どうやって作っているんだろう。でも

「おいしい〜！」

「よかった〜」

「お茶もすつごくいい匂い。先生？ って、色んなことを知ってるん  
だね」

「はい！ おうちに残っている物を見せたら、ヒトはこうやって使っ  
てたよって教えてくれたんです。先生は物知りなフレンズなので！」  
「へ〜！ 色んなフレンズちゃんがいるんだなあ。オルマーちゃんと  
センちゃんはなんでも屋さんしてるって言ってたし」

「みんな、自分の好きなことを見つけて、楽しくしてるんですよ。も  
ちろん、私も」

「……そっか」

イエイヌは明るく笑うけれど、ともえは少し胸が痛んだ。ずっと  
待っているヒトがいて、「会いたかったー」と飛びつくぐらい、楽しみ  
にしている。なのに、ともえは覚えていないし、そもそもイエイヌが  
待っていたヒトとは違うかもしれないのに。イエイヌは優しく、明  
るいばかりだ。

お茶はすつきりとした風味で、優しく喉を潤していった。食事を終  
えて、片付けを手伝いながら尋ねる。

「イエイヌちゃんは、ヒトを待ってたんだよね。ヒトに会えたらこれ  
をしたい！ とか、あった？」

「んえ？ どうしてですか？」

「あたし、イエイヌちゃんが待ってたヒトとは違うかもしれないけど  
……イエイヌちゃんがヒトとやりたかったことがあれば、あたしも一  
緒にできるんじゃないかなって思ってた」

手を拭いて言うと、食器を棚に入れたイエイヌがびっくりするほど  
嬉しそうに笑った。ぶんぶん尻尾が振りたくられる。

「じゃあじゃあ！ 私と一緒に遊んでくれますか?!」

「遊ぶ?」

「はい〜! まだこのおうちにヒトがいた頃、たくさん遊んでもらったんです!」

「そうなんだ! じゃあ私も一緒に遊べるかな……どんなこととして遊んでたの?」

「えっとー、例えばですね!」

テーブルがある部屋まで戻ると、イエイヌが突然床に正座した。いくらカーペットがあつて柔らかいといっても、床に座ると脚が痛いだろうに。ともえも慌てて向かい合わせになるように座った。

「イエイヌちゃん?! どうしたの、椅子じゃなくていいの?!」

手を差し出すと、イエイヌは笑顔になつてともえの手に自分の手を乗せた。あれ、と反対側の手を出すと、イエイヌも反対側の手を乗せる。目をきらきらさせて見つめてくるから、ともえは思わずイエイヌの頬や頭をむいむいと撫で回した。

「イエイヌちゃん今のなに〜?! めっちゃ可愛い〜!!」

『『おて』と『おかわり』ですよ〜! これができるよ、いっぱい褒めてもらえたんです!』

「そうなんだ! 私ほちよつと不思議だけど……イエイヌちゃんが喜んでるからいいのかな……?」

わしやわしやと撫で回してしまったせいで、イエイヌの髪はぼさぼさになってしまったけれど、イエイヌはにっこりと嬉しそうに笑うばかりだった。きつとイエイヌが待っていたヒトも、こうしてたくさんイエイヌを褒めていたんだろうな。ともえは胸が痛んだが、笑つて言った。

「他にはどんなこととして遊んでたの? たくさん遊ぼうよ!」

「はい!」

ロープで引っ張り合いっこして遊ぶと、イエイヌの見た目以上の力強さに振り回されてしまつて、ともえでは歯が立たなかった。ともえが外でボールを投げると、イエイヌはボールを転がして持ってきた。外でのかけっこはまったくこれっぽっちも勝負にならなかったけれ

ど、一緒に走るだけでイエイヌは満足してくれたようだった。一つ遊びが終わる度にイエイヌの頭を撫でると、ぺかーつと光り輝くように笑ってくれる。それだけでもえの心も温かくなる気がした。もふもふしていて、温かくて、ずーつと触っていたくなつて、なんとも不思議な心地がする。

二人しかいないけれど、「おうち」に笑い声は絶えなかった。

「イエイヌちゃん、次は何して遊ぶ?」

「そうですね〜! んつと……あ、これはどうですか?」

イエイヌがオモチャ箱から取り出したのは、円盤だった。受け取る時、とても軽くて薄いことが分かる。

「これを投げてもらって、私が取ってくる遊びをしてたんです!」

「へ〜! これ……私も遊んだことある気がするな」

「本当ですか!」

「うん! 見てて見てて〜!」

円盤を手を外へ出て、地面と水平になるように左手で円盤を持っていた。右肩の辺りから半円を描くように円盤を放ると、ふわりと浮いて飛んでいく。イエイヌが歓声を上げて追いかけていき、軽やかにジャンプして口でキャッチした。そのまま走って戻ってきたのを見て、円盤を受け取る。

「ともえさん、投げるの上手ですね!」

「えへへ、イエイヌちゃんも、円盤取るの上手だね!」

もう一度円盤を投げようとしたが、ふと瞼の裏に白く人影が浮かび上がった。

『——行くよ、<sup>×</sup>。見ててごらん。それっ』

ふわり。円盤が飛んでいく。それを追いかけていく影。逆光で顔がよく見えないその人は、こちらを見下ろして笑ったようだった。

『もう少し大きくなったら、<sup>×</sup>も上手に投げられるようになるよ』

『ほんとう?! どれぐらいおつきくなったら?!』

『うーん、これぐらいかな?』

その人は胸の辺りに手を置いて笑った。ぴよんぴよんジャンプし



ても届かない。

『あーあ、はやくおつきくなりたいなあ』

『はは。×もすぐに大きくなるよ。……ほら、戻ってきた』

円盤を持って走ってくる影。どんどん近づいてくるそれに、大きく手を広げた。

『すごいすごい！ じょうずだね、——！』

「ともえさん？」

はつと我に返ると、イエイヌが不思議そうにともえの顔を覗き込んでいた。

「どうしました？ あ、疲れちゃいました？」

「ううん！ ごめん、大丈夫。ちよつと、思い出したの。円盤で遊んだ時のこと」

「本当ですか?！」

「うん。あたし、たぶんお父さんに投げ方を教えてもらったんだ。もつと小さい頃だけど」

「ふふつ、だからともえさん、投げるのが上手なんですね！」

「だといいな！ じゃあ、もう一度投げるよ、イエイヌちゃん！」

「わー！」

投げる前から走り出してしまったイエイヌを見て笑いながら、ともえは円盤を投げた。青い空を水平に飛んでいく黄色の円盤。それをキャッチしたイエイヌが得意げに笑う。それに笑顔を返して、走って戻ってくる彼女を受け止めた。

そうやって、どれぐらい遊んだらうか。日は傾き、空は夕暮れを迎えていた。外のベンチに座って休憩すると、風が涼しくて気持ちいい。

「ふー、いっぱい遊んだね〜」

「はい〜！ えへへ、たくさん遊べて嬉しいです〜！」

「あたしも楽しかった〜！ イエイヌちゃん、最後に宙返りしてキャッチしたの、めっちゃカッコよかったよ！」

「本当ですか?! えへへえ」

少し汗ばんだ肌に、通り抜ける風が涼しい。へ、へ、と短い呼吸を繰り返すイエイヌを見て、もつとこまめに休憩を挟めばよかったな、とともえは少し反省した。

「ごめんね、イエイヌちゃん。あたし楽しくって……もうちよつと休み遊びばよかったかな」

「いいえ〜！ 私も楽しくって、時間を忘れちゃいました！ ありがとうございます〜！」

「えへへ……よかった」

イエイヌの呼吸が整うのを待つ間、ともえはふと森の方へ目をやった。ともえが目を覚ました建物がここからでも見える。夕焼けに覆われて、どこも橙色に染まっていた。この「おうち」に来てから、ずいぶん時間が経っていることを改めて実感する。

「……オルマーちゃんとセンちゃん、大丈夫かな」

「そういうえば、二人とも戻って来ませんね。新しい依頼があつたんでしようか……」

「だといいんだけど……」

二人で並んで森を眺めていると、大きく木々が揺れた。気になって立ち上がりとした寸前、イエイヌが素早くともえの前に出た。ふさふさとした尻尾がぴんと立ち、喉の奥から低く唸り声を上げる。

「イエイヌちゃん?!」

「セルリアンです、下がって!」

「えっ——」

息を呑んだ瞬間、木々を押しよけるようにしてセルリアンが飛び出してきた。塀を悠々と飛び越えて着地すると、地面が揺れる。四つ足で、イエイヌのおうちと同じくらい大きい。無機質な一つ目がぎよろりとこちらを見据えて瞬間、体の芯から震えが走った。

「……大きなセルリアン……しかもこんなに連続で出るなんて……」

イエイヌは低く唸ると、セルリアンに飛びかかっていった。セルリアンが前足を振り被るが、イエイヌはそれを避けて懐に飛び込んでいく。確かに衝撃を与えたが、セルリアンにはあまり効いていない。イエイヌはすぐに飛び退き、振り抜かれた前足を避けた。

(……石。そうだ、石……！)

ともえは円盤を抱え込んで震えを抑えながら、セルリアンに目を凝らした。どんなに大きくても、石を狙えば倒せると言っていた。せめて、ともえは動き回るセルリアンを見つめたが、石は見つからない。イエイヌが注意を引いてくれているが、背中にも石はなかった。

「……どうしよう、石……石どこ……?!」

戦えないならせめて、ともえはベンチから立ち上がってセルリアンを観察したが、ふと、セルリアンの目がぎよろりとともえに向いた。膝が大きく震え、血が凍りついたように全身が冷たくなる。どうして。どうしてこんなに怖いんだろう。セルリアンが四つ足を動かしてこちらに向かってこようとした瞬間、イエイヌが壁を蹴って跳躍し、セルリアンに体当たりした。よろめいたセルリアンの注意がイエイヌに戻る。

「ともえさん！ 今の内に、おうちに戻って！」

「で、でも、イエイヌちゃん——」

「早く、っぐ——!!」

イエイヌがセルリアンに殴り飛ばされる。ごろごろと地面を転がっていくイエイヌを見て、総毛立った。どうしよう。イエイヌちゃんが。でもあるのは円盤だけ。おうち。おうちなら。何か。

震える脚で走り、おうちの扉に飛びついたが、一瞬で大きな影に覆われた。セルリアンが跳躍している。

ともえは目を見開いた。

目の前に、石が。

「あ——」

「トモエちゃん!!」

横から思い切り体当たりされて、ともえはそのまま地面に転がった。セルリアンがおうちの前に着地し、ぎよろりとこちらを見据える。ともえを抱えるようにして、オオアルマジロが起き上がった。目の前にオオセンザンコウも立ち塞がる。

「無事ですすね?!」

「ま、ま、間に合ったよー！ 遅くなってごめんね！」

「センちゃん、オルマーちゃん！」

「二人とも、どうして！」

イエイヌが驚いた声を上げた。オオアルマジロはともえの手を取って立たせ、オオセンザンコウが言う。

「セルリアンの反応を追跡していましたが、逃げられました。到着が遅れてすみません」

「いいえ、救援感謝します！　ここで撃破しないと、おうちが……！」

「よよよ……っ！　でもこれ大きいよ、レンジャー案件だよお！」

オオアルマジロは困った顔をしたが、ともえを背中に庇ってプロテクターを構えた。イエイヌとオオセンザンコウがセルリアンと対峙する。ともえは急いで声を上げた。

「イエイヌちゃん！　セルリアンの石、お腹にある！　さつき見たの！」

「お腹ですね！　ありがとうございます！」

「っしかし、そうになると脚を切るのは悪手ですね……！」

イエイヌとオオセンザンコウが隙を狙ってセルリアンの懐に飛び込もうとするが、セルリアンは前足を振り回してそれを防いでしまう。何も手伝えないのがもどかしい。

「どうしよう……足を止めたりできないかな……せめて転んでくれたら……」

「転ぶ……。それ！　それだよお！　センちゃん、イエイヌちゃん！

ちよつとだけ時間稼いで！」

「わかりました！」

「トモエちゃん！　ここ！　この草が生えてるところから出ないでね！」

「えっ、わ、わかった！」

ともえが草の生えている場所まで下がると、オオアルマジロは猛烈な勢いで穴を掘り始めた。彼女の姿はあつという間に見えなくなり、穴から土だけがばっさばっさと飛び出してくる。すぐに土の山ができ上がるのを見て呆気にとられていると、オオセンザンコウが悲鳴を上げた。思わず目を奪われる。イエイヌがセルリアンに吹っ飛ばさ

れ、植木に叩きつけられてしまった。

「イエイヌちゃん!!」

ともえが悲鳴を上げたのと、オオアルマジロが地面から飛び出してくるのはほぼ同時だった。ふるふるすると土を振り払ったオオアルマジロがともえの手を握る。

「オツケー、もう大丈夫! あとはセルリアンをこっちに呼ぶだけだよ! センちゃん! こっちに誘導して! こっちこっち!」  
「センちゃん、お願い! こっちに! お願い、こっちにきて!」

ともえも一緒になって叫んだ。オオセンザンコウが気付き、尻尾でセルリアンを切りつけながら徐々に方向転換させてくれる。あと少し、というところまで進んでいたセルリアンは、不意に右足をオオセンザンコウに向かって振り被った。もし当たったら、オオセンザンコウまで。ぞわりと全身が震え、オオアルマジロも血相を変えて声を上げる。

「やめて! センちゃん避けて!」

オオセンザンコウのスカートも尻尾も硬い。でも重量のある一撃に耐えられるだろうか。ともえの脳裏にあったのは植木に叩きつけられたイエイヌだった。ともえには何もできない。見ているだけ。みんなが怪我するのを見ているだけ。

そんなの嫌だ。

ともえはセルリアンに向かって円盤を投げた。綺麗な流線を描いたそれを、一つ目がきよろりと追いかける。一瞬動きが止まった隙に、オオセンザンコウは素早くその場から離れた。セルリアンが前足を勢いよく下ろすと、そのまま地面が陥没し、セルリアンの頭まで沈んでいく。オオアルマジロが歓声を上げた。

「やったー! 狙い通り! ともえちゃん、イエイヌちゃんのところ行ってあげて!」

「ありがとう、オルマーちゃん!」

オオアルマジロがオオセンザンコウに駆け寄っていくのを見て、ともえも急いでイエイヌのもとに走った。植木の下に倒れていたイエイヌは、地面に手を突いて起き上がりとしている。だがその腕は震

え、今にもうつ伏せに倒れてしまいそうだった。

「イエイヌちゃん！ イエイヌちゃん、しつかりして……！」

「……っ、ともえ、さん……？」

肩に手を添えて支えると、イエイヌがよろめきながら起き上がった。左右で色の異なる瞳がともえを見て、笑みに細められる。

「よかった……ともえさんは、怪我してないですね……」

「っ、うん、うん、イエイヌちゃんたちのおかげで、平気だよ……っでもイエイヌちゃんが……！」

「私は、大丈夫。大丈夫ですよ。ヒトを守るのが、私の、使命なので」肩に添えたままだった手を、イエイヌがぎゅっと握りしめた。彼女の視線がともえから外されたのを見て、ともえもその視線の先に目をやる。落とし穴に頭を突っ込んだセルリアンは、後ろ足しか動かせない状態だったが、それでもオオセンザンコウとオオアルマジロが懐に入らないように翻弄している様子だった。「んもー！」とオオアルマジロが困り切った声を上げている。

ぎゅ、と握られる手が強くなったのに気付いて、ともえはイエイヌを振り返った。イエイヌは真っ直ぐセルリアンを見つめて言う。

「ともえさんは、ここにいてくださいいね」

「でも、イエイヌちゃん、たくさん怪我して——」

「大丈夫！ ともえさんがそばにいて、私、分かりました。ともえさんが近くにいと、私もっと、強くなれるって。だから」

イエイヌは振り向き、笑って言った。

「だからともえさん、『がんばれ』って、言ってくださいい！」

土埃に頬を汚して、イエイヌは屈託なく笑っていた。防御が得意なおオセンザンコウと違って、イエイヌは何度も吹き飛ばされ、叩きつけられ、たくさん怪我をしているはずなのに。もうたくさん、頑張っているはずなのに。

「……がんばれ、イエイヌちゃん……」

ともえが絞り出した声は、ずいぶん小さく、か細いものだった。それでもイエイヌは輝くような笑顔で「はい！」と応じて立ち上がる。セルリアンに向かっていく背中に向かって、ともえは思わず声を張り

上げた。

「イエイヌちゃん、頑張れ！　頑張れ、頑張れ……っ！」

応援よりも、お祈りに近かった。オオセンザンコウとオオアルマジロがセルリアンの後ろ足を防いで作られた隙間に、イエイヌが飛び込んでいく。仄かに光を帯びた体躯が食らわせた一撃。真つ直ぐに石を捉えた攻撃が与えられた次の瞬間、セルリアンは細かいキューブと なって飛び散った。小さな輝きを散らして、消えていく。オオアルマジロとオオセンザンコウが安堵した笑顔で手を取り合い、イエイヌが振り返った。

「ともえさん、やりましたよー！」

「……っ、っ、イエイヌちゃん……っ！」

ともえは堪らなくなつて駆け出し、イエイヌに飛びついた。もふりとした感触とともに「ともえさん？」と不思議そうな声がある。脅威が去つたこと、彼女がもう傷つかないこと、戦いが終わったこと、それらが一度に胸に押し寄せて熱を持ち、鼻の奥まで痺れたように熱くなつて、それがそのまま目頭から溢れ出したようだった。ぼろぼろと泣き出すともえを見て、オオセンザンコウはぎよっとして、オオアルマジロは笑う。

「ど、どうしたんですか、ともえさん！」

「ほつとしたよねー。みんな無事でよかつたよお」

「えっ、濡れて……？　と、ともえさん？　ともえさーん……っ？」

イエイヌはおろおろともえの背中を撫で、しゅんと尻尾を下げていた。ずび、と大きく鼻をすすり、ともえは涙を袖で拭う。

「……よかつた……っよかつたあ……!!　あたし、あたしなんにも、できなかつたから……っ!!　みんなに、なんか、あつたら、って……!!」  
しゃくり上げて、何を言っているのか自分でも分からない。けれど、ひつく、えぐ、と上下する背中を撫でて、イエイヌは穏やかな声で言った。

「……ともえさん、大丈夫ですよ。私、嬉しいんです。ともえさんを守れたこと。頑張れて声に伝えられたこと。ちゃんと使命を果たすことができたことが、とつても誇らしいんです」

だから、ありがとうございます。  
イエイヌは笑みを含んだ声で言った。



家に戻って傷の手当をすると、イエイヌは途中から眠ってしまい、そのままベッドに寝かせることになった。フレンズは丈夫だから平気、すぐに治る、と言い張っていたけれど、体力を消耗していたのだろう。オオセンザンコウは「戦うとサンドスターを消費しますからね」と納得顔をして、ジャパリまんの補給をすすめてくれた。

やっと落ち着くことができたともえは、玄関でオオセンザンコウとオオアルマジロを見送った。

「二人とも、今日は本当にありがとう。あたし、何もできなかったから……二人がいて、本当に助かったよ」

「私も助けてもらいましたから。お互いさま、というものです」  
「そうそう！ 私も穴掘るのなんて、隠れる時か寝床作る時だけだったもん。ある程度大きいセルリアン相手だと使えるって分かったし、今度から取り入れてみるよ。……まあ、セルリアンに遭わないに越したことはないんだけどねー」

「そうですね。今回は、イエイヌさんというアタツカーがいたからなんとかあったというもの。今後はさらに注意しないと、ですね」

「食べられるのは怖いもんね〜」

「た、食べられる……?!」

怖いだけの化け物かと思ったら、食べられるだなんて。ぎよつとしたともえを見て、オオアルマジロは慌てて両手を振った。

「ごめんごめん、怖がらせるつもりはなかったんだけど！ でも、本当に危ない奴だし、トモエちゃんも気を付けてね。あんなに大きいのはあまり出ないけど、見たらすぐ逃げるのが一番だよ」

「今回は、逃げるのも危険な距離だったので戦いましたけどね」

「……もう暗くなるけど、二人は、本当に行っちゃうの？ 大丈夫？」

外は日没を迎え、暗くなる一方だ。危険なのは、ともえは心配



したが、二人は笑って言う。

「大丈夫！ 深めの穴を掘って隠れるよ。その方が落ち着くしよ」

「それに、イエイヌさんとしても、私たちがナワバリにいると落ち着かないでしょうから。トモエさんがついていてあげてください」

「トモエちゃんは、今夜はここにいた方がいいけど……明日からは？

どうするか決めてる？ 私たちと一緒に何でも屋さんしちゃう？」

「オルマー」

「だつてえ」

「あはは……ありがとう。あたしは……明日からのことは、イエイヌちゃんに相談してから決めようかなって」

正直に伝えると、オオアルマジロは「そっか」と笑い、オオセンザンコウは頷いた。

「分かりました。では、またどこかで」

「またね、トモエちゃん！ 困った時は、いつでも力になるよ」

「ありがとう、二人とも。またね。気を付けてね」

「はい」

二人が去っていくと、おうちは途端に静かになった。イエイヌは穏やかに眠っている。ともえはしばらくイエイヌの寝顔を見つめたが、テーブルに向かってスケッチブックを開いた。

### 【例のBGM】

らつきーびーすと（施設修繕係）

「オオアルマジロは貧歯目アルマジロ科の哺乳類だネ。アルマジロの中で最も大きい種類とされているんだ。危険を感じた時や眠る時は穴を掘って地中で過ごすヨ。古くなった巣穴は、他の動物が使うこともあるネ。アリクイやナメケモノの近縁とされているヨ。一方、オオセンザンコウは有鱗目センザンコウ科の哺乳類だヨ。オオセンザンコウの体は鱗に覆われていて、どの鱗も端が刃物みたいに鋭いんだ。危険を感じるとお腹をかばって丸くなるけど、鱗で覆われた尻尾で攻

撃することもあるヨ。オオセンザンコウはオオアルマジロと同じで穴を掘って地中で暮らす種類が多いけど、ネコ目やウマ目に近い仲間じゃないかと言われているネ。オオアルマジロとオオセンザンコウは、見た目はよく似ているけれど、分類上は違う動物なんだ」

ふと、イエイヌは目を開けた。眠ってしまったのだ。セルリアンを倒して、ともえさんが泣いてしまっ、おうちに戻って、それから。

「と、ともえさん……!」

慌てて飛び起きると、ともえは椅子に座り、テーブルに突っ伏していた。穏やかに肩が上下している。その姿に、ひどく安堵した。まだ、このおうちにいてくれたのだ。

近づこうか、どうしようか。ベッドに座ったまま考えていると、もぞりともえが身動きした。うー、と小さく唸ったかと思うと、ともえは体を起こし、欠伸をしながら大きく伸びをする。むにやむにやと脛を擦っていたともえは、イエイヌと目が合うと笑顔になった。

「イエイヌちゃん、起きたんだ! どこか痛いところある? 手当、大丈夫だったかな」

「はい、もう平気ですよ。ありがとうございます、ともえさん」

「センちゃんがね、サンドスターをたくさん使ったから、ジャパリまんを食べた方がいいよって言ってたよ。お腹すいてる?」

「……そうですね。お腹ぺこぺこです」

「よかった!……あたしも、安心したらお腹すいちゃって……一緒に食べてもいい?」

「もちろん!」

「じゃあ、あたし取ってくるね! イエイヌちゃんは座ってて!」

ともえはそう言って、台所に走っていった。イエイヌはそれを微笑ましく見送って、テーブルに向かう。テーブルには、ともえが「スケッチブック」と呼んでいたものが置かれていた。中身は白かったはずだが、色が付いている。

「お待たせ、イエイヌちゃん」

「ありがとうございます。……これ、どうしたんですか？」

ジャパリまんを受け取って尋ねると、ともえは「ああ」と笑ってスケッチブックを手を取った。

「絵を描いたの。あたしと、イエイヌちゃんと、オルマーちゃんとセンちゃん！　これがイエイヌちゃんのおうちで、こっちはあたしたちが初めて会った森。ジャパリまん、円盤も描いてみたんだ」

「えを、かく……」

どんなことなのか、イエイヌには分からない。だが、白でなくなつた紙は、大切にすると残り続けるのだという。イエイヌには、その「え」と呼ばれたものがとても輝いて見えた。

「じゃあ、これを見たら、私たちが初めて会った日のことをいつでも思い出せるんですね。素敵です」

「ありがとう！　絵の描き方は忘れてなかったんだあつて、嬉しくなっちゃった」

ともえはスケッチブックを閉じて笑った。二人でジャパリまんを食べていると、ともえが「あのね」と言う。

「……イエイヌちゃんが寝てる間に、あたし、ちよつと考えてみたんだけどね。その、明日からのこと」

「明日……そっか、ともえさんのおうちは、ここじゃ、ないんですもんね……」

きゅ、と胸の辺りが狭まった気がして、イエイヌは思わず膝に両手を落とした。ジャパリまんが少し潰れてしまう。視線も一緒に落ちてしまうと、視界の端でもえがテーブルに手を置くのが分かった。

「……それでね。あの、あたし……イエイヌちゃんが、ここで、大事なヒトを待ってる気持ちも、大事にしたいの。でも、あの……あたし、イエイヌちゃんと、一緒に行きたい。ヒトを探しに行きたいの」

弾かれたように顔を上げた。知らず、耳も尻尾もぴんと立ち上がった気持ちだった。ともえはうろうろと目を泳がせて言う。

「その、あのね、勝手なこと言ってるって、あたしも思うの。だけど、あたし、パークのことよく知らないし、でも、どこかにお父さんとお

母さんがいるなら、会いたくて。それで、もしイエイヌちゃんが、一緒に来てくれたら……すごく、嬉しいなって……あの、思ってたね？も、もしかしたら、イエイヌちゃんが待ってるヒトのことも、何か分かるかもしれないし！ だから、その、えっと」

「……いいんですか？」  
「えっ？」

ともえがやつとイエイヌの方を向いた。イエイヌはジャパリマンをテーブルに置き、ともえの両手に触れる。温かい、大好きなヒトの手だった。

「私、ともえさんと一緒に行つて、いいんですか?!」

「イエイヌちゃんこそ、いいの？ ほ、本当に？」

「はい〜！ ヒトのことについて何か分かったら私も嬉しいですし、何より、もつともえさんの役に立ちたいので！」

「もうたくさん助けてもらっちゃってるのに、いいのかな……でも、ありがとう、イエイヌちゃん。嬉しい」

「はい！ 今日はたくさん寝て、明日の朝に出発しましょう！ 朝になつたらボスがジャパリマンを持ってきてくれますから、それを持つて！」

「……うん！ そうだね！」

不安なこと、心配なことは、実はたくさんある。イエイヌがいない間に、待っているヒトがおうちに帰ってきたらどうしよう。ともえをセルリアンから一人で守れるだろうか。何日ぐらい移動することになるだろう。本当にヒトはいるだろうか。ともえの「おとうさん」「おかあさん」はどこにいるのだろうか。

でも、ともえが笑つたのだ。イエイヌちゃんと一緒に嬉しい、と。喜んでくれたのだ。それだけで、胸の奥がぎゅーっと熱くなって、尻尾が揺れるのを止められない。ヒトに求められている。ヒトの役に立つ機会がある。その日をずっと待っていたのだ。動物だった頃の記憶がぼんやりと遠ざかって、もうあまり思い出せなくなった今でも。

だから、楽しい話だけをした。明日は何を持っていこう。どこへ行

こう。ヒトってどんなところにいるのかな。そんなことを話しながら、二人で一つのベッドに寝そべる。ベッドは大きいから、イエイヌともえが並んで横になっても余裕があった。帽子と靴を外したともえが、枕に頬を預けて言う。

「おやすみ、イエイヌちゃん」

「おやすみなさい、ともえさん」

灯りを消して、暗くした部屋。しばらく静かに横たわっていると、穏やかな寝息が聞こえてくる。よかった、とイエイヌは安堵した。ここで、ともえは安心してくれている。

セルリアンを見て怯えていた姿を思い出す。怯えながら、それでも円盤を投げて注意を引いて、イエイヌに駆け寄ってくれた姿を思い出す。ぱたんぱたと尻尾がシーツを叩く音を聞きながら、イエイヌは小さく笑った。

このコを守ろう。

戦うのが苦手で、怖がりでも、とつても優しいこのコを、イエイヌが守ろう。

もやのかかった遠い記憶の中で、自分より小さなものを守ると、確かに決めたはずだから。

むにむにと何か寝言を呟いているともえに笑みを深めて、イエイヌはそつと彼女に寄り添った。温もりに釣られたのか、ともえがもぞもぞとすり寄ってくる。近くなった温もりが嬉しくて、でも彼女を起こしたくなくて、イエイヌは黙って目を閉じた。

もしかしたら、いつかの日も。こうして優しい温もりに寄り添ったことがあるのかもしれない。

ずつと一人で使っていたはずのベッドに別の体温があることを、不思議なほど嬉しく思いながら、イエイヌはゆっくりと夢の中へ吸い込まれていった。



草木も寝静まった頃。廃墟の片隅でふと起動したロボットは、大急

ぎで自分の使命とされていた対象を確認しに行つた。だがカプセルは開き、中には誰もいない。慌てて建物の隅から隅まで確認したが、どこにも姿はなかった。

「アワ……アワワ……アワワワワワワ……」

ぐるぐるぐるぐるとその場を駆け回り、付近の居住可能区域を検索する。条件に合致する建物を見つけたロボットは、急いで起動地点まで戻ると、もともとのバックパックに加えて大きすぎる荷物を背負い、転がるようにして廃墟から飛び出した。

だが、あまりの荷物の多さに、その足取りは亀と比べるのも失礼なほど遅い。結果的にその静かな移動によって、暗い森の中を一体のロボットが抜けていっても、枝の上や地中で休んでいる生命反応は、何も気にすることはなかった。



翌朝。ともえは少ない荷物を持って、イエイヌの家を出た。増えたのはタオル類と、お茶の葉とポットだ。水筒とペットボトルに水を入れて、負担にならない程度には用意した。忘れ物もない。

「よし！　じゃあイエイヌちゃん、行こっか！」

「はい〜！　そろそろボスが来てくれる頃ですよ〜」

「ボスって、どんな子なの？」

「青くて、小さくて、ちよこちよこ動くコですよ。ウサギみたいに、ぴこぴこ動く耳があるんです」

「ええっ可愛い……楽しみだな〜」

門を出ると、遠くから籠が近づいてくるのが見えた。何か小さな物が運んでいるらしい。イエイヌ曰く、あれがボスなのだという。

「本当に小さいんだね」

「はい。でも、いつもジャパリまんを持ってきてくれるし、何か壊れたら直してくれるし、働きものなんですよ」

「へ〜！」

のんびりとこちらに近付いてくる籠を待っていると、丘の向こうか

ら何か転がってくるのが見えた。カーキ色の塊がごろごろと物凄い勢いでこちらに転がってくる。

「イ、イエイヌちゃんあれ何?！」

「なんででしょう?　ともえさん、こっちに!」

「う、うん!」

門の柱に隠れると、転がってきた何かはズベシャツと音を立てて止まった。砂埃が落ち着くと、カーキ色の塊は大きなりユツクだと気付く。その向こうからぴよこりと飛び出してきたのは、黒い体に灰色の耳をした何かだった。カーキ色のベルトには丸く光るものが付いている。背中には金属の箱を背負っているようだ。真っ黒に塗り潰した眼鏡をかけている。

その後からぽてぽてと歩いてきたのは、籠を持った「ボス」だった。そちらは水色の体に黒いベルトを付けていて、耳で器用に籠を支えている。転がって来たものは、ボスの色違いのように見えた。

ぽてぽてと飛び跳ねながらやってきた黒いボスは、ともえを見上げて言った。

「はじめまして。俺はパークガードロボット、ランボービーストだ。お前の名を聞かせてもらおうか」

「え?　ええと、ともえ、だよ。はじめまして……。あれ?　イエイヌちゃん?」

イエイヌはわなわなと震えながらランボービーストを睨んだかと思うと、尻尾を真っ直ぐに立て、牙を剥き出しにしながら両手を掲げて吠えた。

「ボスの偽物めえっ!!　ともえさんに近付くなあああああつっ!!」

「ええええええイエイヌちゃん?!」

## オープニング

(お気に入りのOP曲をお流しください)

うーんと伸びをして、オオアルマジロは笑って言った。

「今回のオーダーも完了してよかったー。ヒトがいる!　って言われ

た時はびっくりしたけどさー」

「そうですね。次のオーダーも、しっかり取り組んでいきましょう」  
「おー！」

オオセンザンコウと並んで歩き出したオオアルマジロは、ふと茂みが音を立てた気がして振り返った。何かが木々の向こうに消えていく。人影かと思つて足を止めたが、木々の隙間から再び姿を現すことはなかった。一瞬、確かに尻尾が見えた気がしたのだが。

「オルマー？ どうしました？」

「あ、ううん！ 今行くよー！」

オオアルマジロは少し先にいたオオセンザンコウのもとへ走り出した。

(……見間違いだったのかなあ)

オオセンザンコウと同じ、棘上の鱗が繋がったような尻尾に見えたのだけだ。

『予告茶番』

「イエイヌちゃん、おすわり！」

「はい！」

「おて！」

「はい！」

「おかわり！」

「はい！」

「よくできましたー！ イエイヌちゃん可愛い！ わしやわしやしちゃうー！ わしやわしやー！」

「えへへへえ」

「イエイヌちゃん、もふもふしてて温かくて、ほっとしちゃうな」

「はっ！ 私も、ともえさんになでなでされると、ほっとします！」

「本当?! もっとなでなでしちゃうー！」

「わー！ えへへへー！」

「……ヒトのことは、よく分からないナ」

「次回、『Ride』！ 他のちほーにもフレンズちゃんがいるのかな



？  
楽しみだね、  
イエイヌちゃん！」

## 第二話 Ride

ぽってぽってと飛び跳ねながらやってきた黒いボスは、ともえを見上げて言った。

「はじめまして。俺はパークガードロボット、ランボービーストだ。お前の名を聞かせてもらおうか」

「え？ ええと、ともえ、だよ。はじめまして……。あれ？ イエイヌちゃん？」

イエイヌはわなわなと震えながらランボービーストを睨んだかと思うと、尻尾を真つ直ぐに立て、牙を剥き出しにしながら両手を掲げて吠えた。

「ボスの偽物めえっ!! ともえさんに近付くなあああああつっ!!」

「ええええええイエイヌちゃん?!」

### オープニング

(好きな曲をお流しください)

未だに尻尾をぴんと立てたまま唸っているイエイヌの腕を抱えるようにして、ともえは「ランボービースト」を見下ろした。

「えーと、ランボーちゃん……ランボちゃん？ でいいのかな？」

パークガードロボットって言ってたけど、こっちの青い子とは別の種類なの？」

「そうダ。こっちはパークガイドロボットのラツキービースト、パーク内でのアトラクション案内や施設の管理、ジャパリマンの補給を担当している。俺はパークガードロボット、パーク内のヒトをセルリアンから守り、安全な場所まで案内し、護衛するロボットダ。よろしく、トモエ」

「うん！ よろしくね」

ともえは笑顔で言ったが、グルグルと唸り続けているイエイヌはラ

ンボービーストを見下ろして低い声で言った。

「……ともえさんに乱暴したら怒りますよ」

「ら、乱暴ってイエイヌちゃんったら……えっランボちゃんの名前って、そこから来てるの?!」

「ランボーは勇敢な兵士という意味だ。乱暴者という意味ではないゾ」

「なあんだ、よかった……」

「……本当に護衛目的ですか？　ランボービーストなんて見たことないですよ」

イエイヌの警戒はなかなか解けなかった。ともえは苦笑してランボービーストに尋ねる。

「ランボちゃんは、今までどこにいたの？　他にもランボちゃんはいるの?」

「俺は『待機地点で覚醒したヒトを護衛すること』を最後の任務として、スリープモードに入っていた。トモエが起きた場所の近くだ。ランボービーストは他にもたくさんいたが、現地の反応は全てロスト、把握できない」

「……覚醒したヒト？　じゃあ、あたしがどうして眠っていたか知ってるの?!」

「データ、検出できず。答えは『知らない』だ、トモエ」

「ええっ……そっか……」

振り出しに戻ってしまった。ひとまず、籠を抱えたまま立ち尽くしているラツキービーストからジャパリまんを受け取り、木陰で話すことにした。ランボービーストは相変わらず巨大なリュックをずりずりと引きずっている。

「あのね、ランボちゃん。あたしたち、ヒトがいた場所に行きたいの」「ともえさんの『おとうさん』と『おかあさん』がどこかにいると思うんです。なので、ヒトがよく集まっていた場所とか、たくさんヒトがいた場所とかに行きたいのですが」

「了解。マップ情報を取得。パーク内の利用状況分析システムにアクセス。検索中。検索中」

ピコピコと音を立て、ランボービーストのベルトにある丸いものが光り始めた。意味は分からないが、細かい文字が忙しなく表示されている。しばらくそれを眺めながら、ランボービーストの返事を待った。

「何か分かるといいんだけどなあ。イエイヌちゃんは、ランボちゃんを見たことがなかったんだよね」

「はい。私もパークに特別詳しいわけじゃないですけど、黒いボスは初めて見ましたし、ただでさえ黒いのさらに黒いものも着けてるし……怪しいです。信用できないです」

「あはは、イエイヌちゃんったら……」

「それに、こんなに喋るボスも初めて見ました。ともえさんが、ヒトだからでしょうか……?」

「えっそうなの?」

「フレンズと話しているボスなんて見たことがないです。……このボス、色も話し方も変ですよ。セルリアンにおいてはしませんけど、私、あんまり信じられないです」

「うーん……ちよつと様子を見てみようよ。あたしだってまだ起きて二日目だもん。他のフレンズちゃんにとっては、あたしも変に見えるんじゃないかな」

「そんなことないと思うんですけど……分かりました。まずは敵を知るところからです」

「て、敵ではないんじゃないかなー……?」

ピコピコ、と音を立ててランボービーストが放つ光は止まった。ベルトの丸いものに地図が表示される。

「検索完了。ルートを検出したゾ。目的地は遊園地だナ」

「遊園地なんてあるんだ!」

「ゆうえんち、ですか?」

きよとんとイエイヌが首を傾げた。ともえは頬に指を当てて視線を上にする。

「あたし、なんとなく覚えてるよ。色々遊べるものがあって、楽しいところだった記憶がある」

「そうなんですわね！」

「遊園地には、多くのアトラクションがあり、パーク内で最も利用者が多く、宿泊施設も付属。ヒトが長期間、大勢滞在した場所といえは、まづはここだ。目的地まではここから複数の地方を横断して向かうため、乗り物の使用をおすすめスル」

「乗り物？ あたし、運転できないけど大丈夫かな」

「問題ナイ。俺が操縦できる。シンジロ」

「分かった。よろしくね、ランボちゃん」

「……ん？ つまり、ともえさんの命をこれに預けるといわけですか?! 大丈夫ですか?!」

「だ、大丈夫だよイエイヌちゃん！ たぶん！ あたしもよくわかんないけど！」

また尻尾を立てて唸り始めるイエイヌに苦笑して、ともえは話を変えた。

「そういえば、ランボちゃんはたくさん荷物持つてるけど、そのリュックは何？」

「個人野営用装備一式……キャンプセットだ。パーク内の移動は野営が前提になるからナ。ヒトには必要だろうと判断し、持ってきたゾ」  
「へ〜！ ちょっとわくわくするね！」

「……それにしては、ヒトのにおいがしませんね」

イエイヌが鼻を鳴らして言うと、ランボービーストはともえを見上げて言った。

「これは新品だ。衛生的にも問題はナイ。利用方法はキャンプ地を決定し次第、説明するゾ」

「ありがとう！ その荷物も載せられるような乗り物を使えたらいいんだけど」

「格納庫はこつちだ。移動するゾ」

ランボービーストはリュックを頭に乗せたが、明らかに端は地面に擦れ、歩みも遅かった。なんだか可哀想になってもえも手伝おうとしたが、見た目よりも重くて持ち上がらない。

「ええつ、これ、結構重いんだね?! イエイヌちゃん、そつち持っても

らつてもいい?」

「はい!」

イエイヌがともえの反対側からリュックに腕をかけたかと思うと、ひよいつと持ち上がってしまった。ともえが目を丸くしている間に、イエイヌはリュックを両手で抱えてしまう。

「イエイヌちゃん、大丈夫?! 重くない?!」

「私は平気ですよ〜!」

「フレンズは、ヒトと比べて身体能力が高く、腕力に優れる場合も多いんだ。特にイエイヌは、運搬能力も高い方だからナ」

「そ、そうなんだ……ありがとう、イエイヌちゃん。乗り物に載せるまで、任せてもいいかな」

「もちろんです! 何かの時はこのランボービーストの頭に戻せばいいですからね」

「イ、イエイヌちゃん……」

「……イエイヌは……外敵への警戒心の強い動物だからナ……仕方……仕方ナ……」

「ランボちゃんまで……」

見慣れないものに対してここまで警戒するのかと、ともえは苦笑してしまった。同時に、もしイエイヌがヒトを待っていないかったら、と想像してしまう。珍しいフレンズ、と言われた以上、ともえの見た目は他のフレンズにはあまりないのだろう。そんなともえと出会ったら、イエイヌはどうしただろう。

少し背筋が冷たくなつて、ともえはランボービーストとイエイヌに挟まれた状態で困り顔で笑ってしまった。仲良くなつてくれたらいいんだけどなあ。

ランボービーストの案内で向かったのは、ともえが最初にいた建物とは反対側にある、また別の森だった。そこには金属製の巨大な箱のような建物があり、一定間隔で溝の入った四角い蓋がされている。ランボービーストが蓋の隣に向かうと、ピコピコン、と音がした。溝が入った蓋だと思っていたものが音を立てて折りたたまれていき、上へと吸い込まれていく。

「うわー、ここ開くんだ！」

「……少し変わったたにおいがしますね。金属がたくさんあります」

「ランボちゃん、ここに乗り物があるの？」

「そうダ。たくさんあるから、好きなものを選ぶとイイ」

ぴよんこぴよんこと跳ねながら、ランボービーストが建物に入っていく。ともえはイエイヌと顔を見合わせたが、ゆっくりとその後を追いかけた。

ともえたちが入ると、音を立てて照明が点いて明るくなった。自転車ならともえも運転したことがあるが、他には色んな種類のバイクや車が並んでいる。飛行機らしいものまであった。

「うわー！ 本当がたくさん！ あたしとイエイヌちゃんとランボちゃんに乗れるもので、荷物がたくさん積める乗り物って、どれかな……」

「埃とか、古いにおいはしませんね。これもボスたちが綺麗にしてるんでしょうか……」

「ボスって、すごくたくさんお仕事してるんだね。大変だな……」

「トモエ」

ふとランボービーストに呼ばれて振り返ると、とある乗り物の前で飛び跳ねていた。「これはどうダ」と言うから見てみると、水色のスクーターに小さな同色のオープンカーがくっついた乗り物だった。車輪は全部で三つあり、どのタイヤも大きくてごっごっしている。

「ランボちゃん、これなに？」

「サイドカー付きオートバイだナ。車輪が三つで安定しているし、サイドカー付きでスクーター型であるため、積載量も多いのが特徴ダ。ヘルメットの装着をおすすめするゾ」

「へえ……イエイヌちゃん、荷物が入るか試してみようよ」

「はい！ えーと、後ろ？ ですネ？」

スクーターとサイドカーの後部が繋がっていて、トランクになっているらしい。大きなリュックも入り、ともえのバッグはスクーターの座席にある収納部分に入れることができた。イエイヌはサイドカーの方に座り「おお」と表情を明るくする。

「ともえさん！ これ、いいと思います！」

「本当？ じゃあ、これにしようかな。水色で可愛いし！ えーと、じゃあ次はヘルメットだね。ランボちゃん、ヘルメットつてどれでもいいの？」

「顔をすっぽり覆うタイプをすすめるゾ。フレンズ用に、耳をカバーするものもあるからナ」

ランボービーストが向いた方には、ヘルメットがずらりと並んだ棚があった。ともえは真つ先にスクーターと同じ水色のヘルメットを選び、イエイヌは少し悩んだ後に、真つ青なヘルメットを手にとった。イエイヌの尖った耳も潰すことなく、すっぽり頭を覆うことができそうだ。

「あれ？ そういえば、ランボちゃんのヘルメットはないの？」

「俺はいらんやんダ」

「そうなの？ あ、眼鏡？ つけてるから？」

「イヤ。これは目を守るために着けているだけダ」

「え？ ランボちゃん、目が弱いのか……？」

まさかそんな事情があると思わなくて尋ねると、ランボービーストはぴこりと眼鏡を跳ね上げた。左目のあった場所はひび割れてしまい、金属質な丸い目が剥き出しになっている。イエイヌの毛がびゃつと逆立ち、ともえも一瞬怯んでしまった。

「ランボちゃん、それは……？」

「スリープモードに入る前の作戦で破損したんだ。片目だけ光に過敏になってるから、サングラスをかけている。視覚情報の取得には問題ナイ」

「そうなんだ……。痛くないの？ 平気？」

「口ポットに痛覚はナイ。……大丈夫だヨ、トモエ」

「そっか！ よかった……」

ぴこりとサングラスを戻したランボービーストと、やっと毛並みが落ち着いたイエイヌを見て、ともえは「あー」と声を上げた。

「どうしました？ ともえさん」

「あ、ごめん、大したことじゃないんだけど……あたしたち、三人とも



片目ずつ違うんだなーって思ってた」

「言われてみれば、そうですね！　ともえさんも、片方は青だけど、もう片方の目は違う色です」

「ね！　えへへ、偶然かもしれないけど、おそろいがあるって嬉しいね！」

「はい！　そうですね！」

イエイヌは嬉しそうな顔をしたが、はっとランボービーストを振り返った。

「いえ！　まだ！　仲間と認めたわけではありませんからね！　これからです！　これから！」

(あ、よかった……これからは認めてくれるんだね……)

ふふ、とトモエはこっそり笑ってヘルメットをかぶった。イエイヌも慎重にヘルメットをかぶる。

「イエイヌちゃん、耳痛くない？」

「はい、平気です！」

「よかった！　よーしっ、出発進行！　よろしくね、ランボちゃん」  
「シンジロ」

イエイヌがサイドカーに座り、ともえもスクーターにまたがると、ランボービーストはハンドルの間に飛び乗った。ピコン、と音を立てたかと思うと、エンジンがかかる。

「うわー！　動いた！」

「ハンドルをしっかりと握っておけ」

「うん！」

ともえはハンドルを握っているだけだったが、スクーターはゆつくりと動き始めた。建物から出ると折れたたまたまれていた蓋が下りてきて、元通り閉まっていく。森の中を通る道に出るとスクーターのスピードが増し、どんどん風を切って進んでいった。

「はやーい！　すごーい！」

「これはいいですね！　自分で走るよりも速いかもしれません！」

「この道路は整備用にラッキーマスターが整えているから、スピードも出せるんだ。このまま草原地方を抜けるゾ」

「はいー！」

ともえは座ったまま、景色だけが飛ぶように過ぎていく。あつという間に森を抜けると、開けた草原に出た。見渡す限りの緑。遠くには高い山が続き、空は広く澄み渡っている。運転をランボービーストに任せていると、周囲の景色を楽しむ余裕があつてよかった。

「すごく広いんだね！ フレンズちゃんもいるのかな〜」

「ともえさん、ウマのフレンズさんたちが走ってますよー！」

「えー！ どこどこ?!」

イエイヌの指差す方向を見ると、軽やかに草原を走っていく人影があつた。長い髪が風になびいて、とても綺麗だ。

「わあ……色んな子がいるんだね。みんな走るのが好きなのかな」

「草原でゆっくり過ごすフレンズは少ないからナ。走るフレンズの方が目立つものダ」

「へ〜。それはやっぱり、動物の頃そうしてたから、とか、そういう感じかな」

「覚えていなくても、習性を引き継いでいるフレンズは多いゾ」

しばらく景色を楽しみながら走っていると、やがて広い畑に挟まれた道に出た。色んな作物が育てられており、たまにラツキービーストが籠を支えて飛び出して、大きな建物へ向かっていく。

「ラツキーちゃんだ！ ここで何してるのかな」

「ここはジャパリまんの生産地だナ。左右にあるのは全部畑ダ」

「全部?! すごく広いよ?!」

ともえは思わず周囲を見回した。先ほどまで地平線まで緑が続いていたが、今は背の高い作物などで遮られ、どこまで畑が続いているのか見えなくなっていた。ランボービーストはスクーターの速度を少し落としながら言う。

「日当たりも良く、降水量も適切な地域だからナ。気候が安定した地域で大量生産して各地に輸送スル。効率的ダ」

「色んな野菜のにおいがあります〜。お腹がすいてきますね」

「ヘルメットしてても分かるんだ、すごいね！ じゃあ……ランボーちゃん、どこかで休憩したいんだけど、いい?」

「了解。進路を変更スル」

ランボービーストがスクーターを向かわせたのは、畑の外れにある小高い丘だった。道にスクーターを置いて、木陰に座る。いつの間にか太陽は真上に来ており、移動を始めてからいつの間にか時間が経っていることが分かった。

「いただきますー！」

「いただきますー！」

お昼ご飯は、水筒に入れたイエイヌお手製のお茶と、ジャパリマンだ。そよそよと涼しい風が吹き抜けていき、それに合わせて木漏れ日も揺れる。

「んー、お外で食べるジャパリマンも美味しいねー！」

「そうですね！ いつも食べてる味ですけど、いつもより美味しい気がします」

「えへへ。ピクニックみたいだなく。それに、景色も綺麗。めっちゃ絵になる〜」

少し高い丘に来たおかげで、今は広々と続く畑も一望することができた。広大な畑の手入れをするラツキービーストの苦労を想像すると手放して喜べることではないかもしれないが、晴れ渡った空の下で風に揺れる畑の作物は、とても絵になった。ふと反対側に目をやると、もさもさと葉が生い茂っている場所もある。こちらも畑かと思っただが、ラツキービーストもそちらでは作業していない様子だった。

「ランボちゃん、あっちの葉っぱがたくさんあるところは何か？ あれも畑？」

「いや、あれはタデアイダナ。虫除け、毒蛇除けになる植物で、昔の戦士はあの植物で足の装備を染めていたらしい」

「染める？ 葉っぱで？」

ともえは何となく想像したが、靴下にぎゅうぎゅうと葉っぱを押し付ける方法しか浮かばなかった。それを察したのか、ランボービーストが言う。

「あの葉を煮込んで布を入れると、青く染まるんだ」

「そうなんだ……不思議だね。葉っぱはあんなに綺麗な緑なのに」

「実には解毒作用もあり、薬として使われていた歴史もある植物だ。覚えていて損はないゾ」

「うん、ありがとう。たくさん生えてるんだねー。……あれ?」

指で囲いを作って景色を眺めていると、少し離れたところに建物が あることに気付いた。屋根が一部崩れ、ツタに覆われている様子だが、尖った屋根が綺麗だ。

「あそこにも建物があるんだね」

「行ってみますか?」

「うん!」

水筒を片付けて、再びスクーターにまたがった。とことことスクーターを走らせて建物に向かうと、誰かが扉を叩いている。

「ヒツジあるじー! 開けてよー! クーちゃんと遊ぼうよー! ねーってばー!」

長い黒髪と首にかけて大きな白い首輪を揺らして、バンバンと扉を叩いていた。髪にはピンクのヘアピンを着けている。小さな尖った耳と短い尻尾があるから、彼女もフレンズなのだろう。ランボービーストがスクーターを停めてから、ともえとイエイヌも建物に向かった。

「こんにちはー! 何してるの?」

「あれ?」

振り返ったフレンズは、ともえとイエイヌとスクーターを見比べて

「わああ」と目を輝かせた。

「フレンズだー! どこから来たのー? ヒツジあるじの友達?」

「クーちゃんと遊ぶ?」

「あわわわ」

立て続けに質問されて慌てていると、ランボービーストが言った。

「クビワペツカリーのフレンズだな」

「クビワペツカリー?」

「あれー? 私のこと知ってる? そうだよ、クーちゃんはクビワペツカリー! このクビワが目印なんだー! きれーでしょー?」

そう言っつて、クビワペツカリーは首に対して大きすぎる白い首輪を

見せてくれた。かと思うと、イエイヌに駆け寄る。

「あなたもクビワがあるの？ 変わった形だねー」

「これは首輪じゃなくて、ハーネスですよ」

「はーねす？」

不思議そうにしているクビワペツカリーを見て、ともえは慌てて言った。

「はじめまして。あたしはともえ。こっちは、イエイヌちゃんだよ」

「はじめまして、イエイヌです。私たち、森の方から来たんです」

「そうなんだー！ クーちゃん、あんまり遠くに行かないから知らなかったー。二人は、遊びに来たの？」

「えーっと、うーん、そうだね？ そうかもー！」

何の建物だろう、と気になって立ち寄っただけだから、と答えると、クビワペツカリーは輝くような笑顔になった。

「じゃあじゃあ、クーちゃんと遊ぼうよ！ トモエあるじと、イエイヌあるじって呼んでもいい?!」

「ええ?! あるじ?!」

思わぬ呼び方にイエイヌと二人で驚くと、クビワペツカリーはきよとんと首を傾げた。

「一緒に遊ぶなら、もうお友達でしょー？ じゃあ、あるじって呼びたいなーって」

「そうなんだ…えっと、じゃあ、うん、お友達に、なろう！ クーちゃんって呼んでもいい？」

「いいよー！ 何するどこいくー?! あるじと一緒にならどこでもついていくよー！」

ともえとイエイヌの周りを駆け回って笑うクビワペツカリーを見て、ともえは苦笑した。

「元気いっぱいなフレンズちゃんなんだね」

「クビワペツカリーさん、さっき『ヒツジあるじ』と呼んでいましたが……」

「あ！ そう！ そうなの！」

急に足を止めたクビワペツカリーは、真剣な顔でともえたちを振り

返った。

「今日もヒツジあるじと遊ぼう！　と思つて来たんだけど、ヒツジあるじが出てきてくれなくなつて……クーちゃん何かしちやつたのかな……」

「そうなんですか？　それは気になりますね」

「トモエあるじとイエイヌあるじと遊べたら嬉しいけど、ヒツジあるじもいたらもつと楽しいのになー」

クビワペツカリーはしよんぼりと肩を落としてしまった。ともえも建物を見上げる。

「どうしたんだろう……具合が悪かったりしないといいんだけど」

「え?!　ヒツジあるじ、病気なの?!」

「えついやあの、もしそうだったら心配だなつて——」

「待つててねヒツジあるじー！　あるじのためなら火の中水の中だよー！」

「ちよつと、クビワペツカリーさん！」

クビワペツカリーが駆け出したのを見てイエイヌが慌てて追いかけたが、クビワペツカリーの猛烈な勢いを止めることはできなかつた。クビワペツカリーが突進して扉をこじ開ける。

「ヒツジあるじー!!」

「待つてくださいー!!」

「きやあああああ?!　何なのよおおお?!」

三者三様の声が上がリ、ともえは急いで扉に駆け寄つた。

「だ、大丈夫?!」

「クビワペツカリーさん、落ち着いて！」

「ヒツジあるじに何かあつたら私はく!!　絶対助けて……あげ……あれれ?」

イエイヌに抱えられたままじたばたと暴れていたクビワペツカリーが、きよとんと動きを止めた。室内では、二本の編み棒と毛糸玉を抱えて座り込んでいるフレンズがいる。

「ヒツジあるじ、元氣だったー！　よかつたー！」

「クビワペツカリー?!　それに、あの、誰?!　どこのフレンズなのよ

?!」

「あはは……ぐっ、ぐめんなさい……」

ともえは困り切って、笑うしかなかった。

### 【例のBGM】

らつきーびーすと（ナス科担当）

「クビワペツカリーは、鯨偶蹄目ペツカリー科の哺乳類だネ。ペツカリーの中では体が小さくて、全身が暗灰色など暗い色に対し、首周りに白や黄褐色の帯があり、これが首輪に見えることから、クビワペツカリーと呼ばれているヨ。視覚や聴覚の代わりに、嗅覚がとても発達している動物で、仲間に体を擦りつけてにおいをつけることで、コミュニケーションを取ると言われているネ。群れで行動する動物で、もし肉食獣に襲われた時は、一番弱っている個体が肉食獣の注意を引き付けて、他の仲間を逃がす行動を取ることがあるヨ」

ともえたちから話を聞いたヒツジは「なるほど」と溜息を吐いた。

「トモエたちは旅の途中に立ち寄っただけで、クビワペツカリーは心配して飛び込んできただけだったのね。……心配かけちゃってごめんね、クビワペツカリー」

「ううん、クーちゃんも早とちりしちゃって、ごめんなさい……。でもヒツジあるじ、どうして今日は遊んでくれなかったのー？　クーちゃん寂しかったよー」

「……あー、恥ずかしいなあ」

ヒツジはもこもこ丸まった髪の上から頬を押さえて俯いたが、やがて籠から何か取り出した。毛糸で編んだ筒だ。

「クビワペツカリーが、おそろいの首輪が欲しいって言ってたでしょ？　それで、次に遊ぶ時まで、最っ高にぷりちーな首輪を作ってるって決めてたの。だけど、なかなか納得できるものが作れなくて……」

「えー?! そうだったの?!」

「ヒツジちゃん、自分で作ってたの? すっごーい! これ、毛糸だよ  
ね?」

ともえが言うと、ヒツジは「そうよ」と笑った。

「私の髪つてば、すぐに伸びちゃって、ぷりちーに整えるのが難しかったのよ。でも、先生がこのおうちにある道具の使い方を教えてくれたから、自分の髪を切って、毛糸にする方法が分かったの! それを編んで、首に巻いたらぷりちーじゃない? と思って、作り始めたのはよかつただけど……」

ヒツジは落ち込んだ様子で、毛糸で編んだ真つ白な布を膝に置いた。

「白い首輪つて、クビワペツカリーがいつも着けているものと一緒でしょ? 大事な友達にあげるんだもん、特別ぷりちーなものを用意してあげたかったの。……間に合わなくて、こんなことになっちゃったけどね」

ヒツジは金具から外れたままの扉を見て遠い目をした。ともえは慌てて言う。

「と、扉はすぐに直すよ! あたしがクーちゃんに勘違いさせちゃったみたいなものだし……」

「ああ、そういうつもりじゃないの。クビワペツカリーが勢い余って外しちゃうこと、よくあるから」

「えへへ、ごめーん……ねえヒツジあるじ、そのクビワ着けてみてもいい?」

「いいけど……まだ作りかけなの?」

「いいのいいのー!」

もふもふとした輪を首にかけたクビワペツカリーは「おお」と目を輝かせた。少し締め付ける大きさなのか、押さえられた長い髪がもふりと膨らんでいる。

「あつたかーい!」

「でしょ? クビワペツカリーつたら、風が寒い日も走って遊びに行くんだもの。私は全身もこもこしてて温かいけど、あなたはそうじゃ



ないんだから。それで、温かい首輪を用意できたら、と思ったんだけど……」

「これ、真っ白でクーちゃん好きだなー！ ヒツジあるじとおそろいだよー？」

「……そうだけど、なんか違うのよね」

ヒツジは溜息を吐いた。イエイヌは「そうなんですか？」と不思議そうにクビワペツカリーを見ているが、ともえは「あっ」と声を上げた。

「もしかして、クーちゃんの髪も服も黒いから、気になるの？」

「そう！ そうなの！ 色のバランスってものがあるじゃない？ できたら、ほら、せめて髪飾りと同じ色を入れたかったの。でも、私の髪と同じ色の毛糸しか用意できないから、それも難しくって」

「色、かあ……」

ともえはなんとなくクビワペツカリーが身に着けた毛糸の首輪を見つめた。

「クーちゃん、これ好きだよ？ 結ばなくても落ちないし、あつたかいし！ ヒツジあるじとおそろいだよー？」

「ありがとう。でもせっかくなら、もっとぷりちーにしたいのよっ！ 私は白くてぷりちーだけど、クビワペツカリーは黒くてぷりちーなんだから」

「クーちゃん、ぷりちー？ えへへ」

「仲良しなんですネ、二人とも」

ほのぼのと話している三人を見ると、ふとタデアイを思い出した。

「ねえ、ランボちゃん。タデアイは青に染めることができるんだよね。ピンクに染めることができる植物もあるのかな」

「了解。検索中、検索中……」

ピコピコとランボービーストが音を立てると、クビワペツカリーとヒツジが振り返った。

「なにになに〜？ 今ボス、しゃべった？」

「不思議なこともあるのね。……というか、いつものボスと色が違う

のね?。」

「えっと、ランボービーストっていうんだって。ねえ、ヒツジちゃん。毛糸を染めたことある? 白い毛糸も、他の色を付けられるんだって。」

「そんなことができるの?! 素敵ね!。」

ヒツジが目を輝かせたのを見て、ともえは嬉しくなつて続けた。

「あのね、タデアイって植物の葉っぱと毛糸を一緒に煮込むと、毛糸が青くなるんだって。」

「タデアイ?。」

「あつちの丘の近くでいっぱいわさわさしてる葉っぱなんだけど、知らない?。」

「それならわかる〜! クーちゃん、そこよく走ってるから!。」

「葉っぱを、にる? っていうのをしたら、毛糸が青くなるのね?。」

「そう、らしいよ。ランボちゃんが言つてたの。だからもしかしたら、毛糸をピンクにする方法もあるんじゃないかなって思つて。」

「素敵じゃないの! 毛糸の色を変えることができれば、編み物の幅も広がるし、またぷりちーが増えちゃうわねっ!。」

両手を合わせて笑うヒツジを見て、クビワペツカリーも嬉しそうにしていた。イエイヌも笑つて言う。

「この辺りは畑もありますし、ボスに事情を話したら、ピンクに染まるものもくれるかもしれませんね!。」

「そうだね! 手に入りやすいのがあるといいんだけどな……。」

「検索完了!。」

ポコン、と音を立てて作業を終えると、ランボービーストはともえを見上げた。

「トモエ。草木染め教室の資料にアクセスしたゾ。ピンクに染める植物として、周辺の植生上入手しやすいのは、ビワの葉だ!。」

「ビワ? ビワって、あのオレンジ色の果物だよね? オレンジじゃなくて、ピンクに染まるんだ……。」

「びわってなにー?。」

クビワペツカリーに尋ねられ、ともえはスケッチブックを開いた。

オレンジの色鉛筆でビワの実を描く。

「こういう実がなる樹なんだけど、知らない？」

「あー！ それならクーちゃんわかる！ 近くにあるよー」

「本当?! じゃあ、早速取りに行こうよ！」

「おー！」

ランボービーストも連れて四人で建物を出ると、クビワペツカリーは建物の裏へと走っていった。慌てて追いかけると、いくつも樹が並んでいる。クビワペツカリーが示したのは、その中でも背の高い樹だった。枝から箒のように何枚も葉が伸びている。

「この木だと思う〜！ 前に、さつきみたいな木の実、食べたことあるからー！」

「ありがとう、クーちゃん！ ランボちゃん、葉っぱってどれぐらい必要なのかな」

「染めるものの大きさによるが、毛糸玉一つ分なら、トモエの帽子いっぱい分で足りるだろうナ」

「わかったー！」

みんなで協力して、高さが足りない枝から葉を取る時はイエイヌがヒツジを肩車して、帽子に葉っぱの山ができるぐらい集めた。

「いっぱい取れましたねー！」

「これでピンクの毛糸ができるのね。……不思議ね。どうなってるのかな」

「あー！ トモエあるじ〜、たであい？ も取ってきていいー？」

「いいよ！ 青い毛糸も作ってみる？」

「そうねっ、白とピンクと青の毛糸があったら、とってもぷりちーだと思おうの」

ヒツジの同意もあり、タデアイも抱えるほど集めた。タデアイの葉を千切っていたイエイヌが言う。

「ともえさん！ この葉っぱ、千切れたところが青いですよ！」

「えっそうなの?! そっか、それで青く染めてくれるんだ〜！」

「ふふっ、毛糸に色を付けるのが楽しみねっ」

ヒツジのお家まで戻り、ランボービーストが持ってきてくれたキャ

ンプセットから焚火台と鍋を取り出した。四人でビワとタデアイの葉を水で洗っている間に、毛糸をことごと鍋で煮込み、温める。綺麗に洗った葉は細かく千切り、それぞれザルに入れてから鍋に重ねた。葉が浸るぐらいの水を鍋に入れて、またぐつぐつと煮込む。お湯が温まった頃合いに、鍋に毛糸を入れて、さらに煮込んでいく。

「これでいいんですね？」

「うん！ あとはこのまま煮たら……あれ？」

ふと振り返ると、ヒツジとクビワペツカリーが離れたところに隠れてこちらを見ていた。

「ど、どうしたの？ ヒツジちゃん、クーちゃん……」

「あの……なんかその、熱いのがちよつと……」

「こわい、かもーって……」

「そっか、火が怖いんだね……あれ？ イエイヌちゃんは平気だよね？」

「はい〜！ 大丈夫です！」

イエイヌは笑顔で答え、ぱたぱたと尻尾を振っていた。イエイヌはとても自然にお茶を淹れてくれたから気づかなかったが、火が苦手なフレンズもいたのか。気を付けなきゃ。

「じゃあ、あたしたちで毛糸に色を付けてもいい？」

「うー、お願い〜」

「あ！ じゃあ私、その間に別の作業しようかな。しばらくお願い！ クビワペツカリーは、ここで見てて」

「はい」

家に戻っていったヒツジを見送って、二人で鍋の様子を観察した。どんだん色が出ているのが分かる。

「……なんだか、変わったにおいになりましたね。葉っぱのままの時とはまた違います」

「本当？ イエイヌちゃん、平気？」

「平気ですよ。タデアイ？ の方は、なんだかスーツてするにおいですね」

「そうだね、爽やかな感じ！ お湯の色もだいぶ変わってきたね」

あつという間にビワのお湯は茶色、タデアイのお湯は緑色になった。ザルを引き上げて、毛糸をほぐすようにお湯をかき混ぜたら、タデアイの鍋を火から上げて自然に冷めるのを待つ。鍋に指を入れても平気になったら、毛糸を取り出して、最初に煮込んだ時に使ったお湯で洗った。ビワの鍋は毛糸が少しオレンジがかっているように見えるから、もう少し煮てみる。

洗うのは手伝う、とクビワペツカリーが言ってくれたので、イエイ又とクビワペツカリーに毛糸を洗ってもらった。クビワペツカリーがはしゃいだ声を上げる。

「すごいすごい！ あんなに白かった毛糸が青くなってる！ きれーだねー！」

「はい〜！ とつても綺麗です！ お鍋で煮込んでいた時は、緑色に見えたんですけど、こんなに青くなるんですね」

「これ、洗ったらどうするのー？」

「日陰で干す、だそうです」

「はい！ 今日天気もいいし風もあるから、きつとすぐ乾いてくれるねー！」

ビワの鍋も、煮込んでいるうちに濃いピンクになってきた。その辺りで鍋を火から上げて、焚火台をランボービーストに任せ、鍋を冷やす。毛糸はまたお湯で洗って、日陰で干した。

「ふー。これで、あとは乾くのを待つだけだね」

「わくわくしちゃうね〜！ 綺麗な毛糸になるといいな〜！」

「きつとなりますよ、今だつてこんなに綺麗なんですから！」

後は鍋を洗うだけだ。せつかくなのでお湯は植物の邪魔にならないところに流して、空になった鍋を水道に持っていく。焚火台を片付けてくれたランボービーストもやってきた。

「ありがとう、ランボちゃん。おかげで助かったよ」

「火の扱いに慣れたものが担当すべきだからナ。問題ナイ」

「黒いボス、器用なんだねー。ボスってみんなそうなのかな？」

「色んな仕事をしていますからね、ボスたちは……でも手はないですよねっ。」

「ないねー。不思議〜」

そんなことを話しながら鍋を洗おうとしていると、イエイヌが弾かれたように振り返った。クビワペツカリーも動きを止める。

「どうしたの？」

「臭います。セルリアンです」

「セルリアン?!」

「たぶん、ちっちゃいと思うよー? でもなんか、何体かいる……?」

イエイヌがともえを背にかばった瞬間、地面から滲み出るようにセルリアンが現れた。確かに丸っこい体は小さな球体だが、ぽこぽこ四匹も湧いて出てくる。

「うわあ! いっぱいいる!」

「ともえさんは私のそばに! クビワペツカリーさんは——」

「あるじたちを傷つけたらだめー!」

クビワペツカリーが猛烈な勢いで駆け出してしまった。クーちゃん、と呼ばひ止める間もなくセルリアンに突撃していくが、セルリアンはふわりと浮かび、相手を失ったクビワペツカリーは派手に転んでしまう。

「あうう……飛ぶなんでするいよー!」

セルリアンはふよふよと浮かび上がり、頭上からともえたちを見ていた。ぎよろぎよろと動く一つ目は、誰を狙おうか思索しているようにも見える。

「どうしよう……石はたぶん、後ろだよね?」

「ですね。でも私のジャンプ力だと、あの高さは……」

イエイヌとセルリアンが睨み合う。どうしよう、ともえが周囲を見回そうとしたその時、ランボービーストのサングラス越しに赤い光が見えた。

「ターゲットを捕捉。ただちにこれを迎撃スル。主砲用意」

ランボービーストが背負っていた箱が開き、二本の筒が出てきたかと思うと

「発射」

虹色に光る弾丸が立て続けに四発放たれる。光は真っ直ぐにセル

リアンに向かっていき、セルリアンが振り返る前に石を撃ち抜いた。一瞬で木端微塵になったセルリアンを、ともえたちは呆然と見上げるしかなかった。

「ターゲット、殲滅を確認。ミッションコンプリート。武装、解除スル」

ランボービーストは静かに宣言すると、元通り箱を閉じた。衝撃から我に返ったともえたちは、三人してランボービーストに駆け寄る。

「黒いボス今のなに?! バンバンバーン! って! やっつけちゃったよー!」

「今のはボスの得意技ですか?! 一瞬で石を攻撃するなんてすごいです!」

「ランボちゃんすごいよー! そのリュック何だったの?!」

ぺたりと尻もちをついたランボービーストは、ともえを見上げて答えた。

「俺はパークガードロボットだからナ。対セルリアン用に武装している。今のは、空気中のサンドスターを凝縮して弾丸として発射する武器を使っただけダ。再装填には時間がかかるが、周囲にセルリアンの反応はナイ。しばらくは大丈夫だろウ」

「へ〜! サンドスターって、空気中にもあるんだね。あたし、あのキューブみたいなものしか知らないから」

「ジャパリパーク内の地形は、全てサンドスターによってつくられたものだからナ。空気中にもサンドスターが漂っているんだ。それを活用している」

「サンドスターって、そういう使い方もできるんだー。初めて知ったよー」

クビワペツカリーが驚いた顔のまま言うから、ともえは思わず尋ねた。

「フレンズちゃんもできることなの?」

「いいヤ。俺が知っている範囲では、パークガードロボットとレンジャー部隊に支給されている武器でしかできない攻撃ダ。フレンズは行動そのものにサンドスターを消費するから、仕組みが違ウ」

「そっか……。うーん、知らないことがまだまだたくさんあるんだね」  
「一つずつ覚えていけばいいんだヨ、トモエ」

「うん。ありがとう、ランボちゃん」

気を取り直して鍋を洗って乾かしている間に、毛糸は乾いていた。元通りの毛糸玉にすると、綺麗な青色の毛糸とサーモンピンクの毛糸ができてあがる。「わー！」と三人分の歓声が上がった。

「綺麗にできてよかったね！」

「ほんとー！ すっごくきれー！ ヒツジあるじ、喜んでくれるといいなー」

「早速、渡しに行きましょう！」

ヒツジの家に戻ると、少ししてからヒツジが出迎えてくれた。青とサーモンピンクの毛糸玉を見て、目を輝かせる。

「きやく〜！ すっごくぷりちーじやないの、これ！ とつても綺麗ね！ ありがとうっ！」

「えへへ、よかった。毛糸の量、足りるかな？」

「もちろん！ 大事に使ってみるね。完成したのを見てほしいから、もう少し一人で作業したいの。ちよつと待ってもらってもいい？」

「いいよ！ 楽しみにしてるね！」

「がんばれ、ヒツジあるじー！」

毛糸を受け取って足取りも軽く去っていくヒツジを見送り、ともえたちは庭に戻った。焚火台や鍋をリュックに戻し、顔を見合わせる。

「あたし、この辺りの景色を絵に描きたんだけど、いいかな」

「もちろんですよ〜！」

「じゃあイエイ又あるじ、クーちゃんと遊ぶ?!」

「ふふ、何して遊びましょうね〜」

「わーい！ 遊ぶ遊ぶ〜！」

走っていくイエイ又とクビワペッカーを見送って、ともえは建物の前に座った。ランボービーストが少し離れたところから見守っているのを感じながらスケッチブックを開き、画材を手取る。

楽しそうに走って遊ぶイエイ又とクビワペッカー、その背景には畑が広がり、豊かな緑に満ちている。



「……やっぱり、絵になるなー」

ともえは笑って、膝に置いたスケッチブックに向かった。



クビワペツカリーに一言断ってから、イエイヌはランボービーストに向かった。ともえは真剣にスケッチブックと景色を見比べているから、こちらには気付いていないようだ。ランボービーストはともえの方を向いたままだったが、イエイヌは隣に座り込んで言った。

「……ボスはフレンズと話をしません。それはあなたも同じです。だからこれは、私の一方的な宣言になりますが、聞いてくださいね」

ランボービーストの耳がぴこりと揺れた。イエイヌはともえの横顔を見つめて続ける。

「……きついことを言って、ごめんなさい。正直に言うと、あなたのことを完全に仲間として受け入れたわけではありません。しかし、あなたがとても強力な味方であることは確かです。ともえさんを守るために、共同戦線を張りたいと思います。私はともえさんの近くにいる地上のセルリアンを、素早く倒します。あなたは、ともえさんから離れた、空中にいるセルリアンを速やかに倒します。役割分担をすれば、もつと確実に、ともえさんを守ることが可能です。それはとても、大切なことだと思います。私はともえさんを守りたい、あなたはヒトを守りたい。目的が一致しているのだから、協力できるはずですよ」

ランボービーストは答えない。サングラス越しで視線も分からなかったが、確かにイエイヌの言葉を聞いているようだと感じた。イエイヌは微笑んで言う。

「だから、改めてこれから、よろしくお願いします。ボス」

「イエイヌあるじー！ 今度はかけっこしようよー！」

「はーい！ 今行きますー！……それでは」

イエイヌは立ち上がり、クビワペツカリーに駆け寄った。

その背中を、ランボービーストはしばらく見送った。ぴこん、ぴこん、と尻尾を揺らし、ともえに視線を戻す。

本日は晴天なり。風も日差しも穏やかで、何より確かな仲間を得た今、絶好の日向ぼっこ日和なのである。

### 【例のBGM】

らつきーびーすと（葉物担当）

「ヒツジは、偶蹄目ウシ科ヒツジ属の哺乳類だネ。ヤギに似ているけど、角は渦巻形で、角のない種類もあるヨ。全身を柔らかくて長い巻き毛に覆われているのが特徴だネ。家畜としての歴史も長くて、世界中で色んな品種が生まれたヨ。草食性で、気質は大人しく、群れを作って生活する習性があり、『群れる』という漢字の語源になった動物でもあるヨ。ヒトにとって身近な動物なこともあって、文化、宗教、言語など、幅広く影響を与えているところもあるネ」

「できたー！」

ヒツジの歓声を聞いて、ともえたちは建物を振り返った。ともえがスケッチブックを持って立ち上がる間に、クビワペツカリーが屋内に飛び込んでいく。イエイヌが浅い呼吸を繰り返しながら言った。

「クビワペツカリーさん、あんなにたくさん遊んだのに、まだまだ元気みたいですよ」

「あはは、すごいよね！ イエイヌちゃんは楽しかった？」

「はい〜！ 乗り物も速くて便利ですけど、自分の足で走るのは楽しいですよ！ ともえさんも、えをかいていたんですよ？ できましたか？」

「うん！ 見て見て！」

イエイヌに見せたスケッチブックには、走るイエイヌとクビワペツカリー、編み物をしているヒツジ、それから広々と続く畑と青空を描いていた。端にはビワの実とタデアイの葉もある。イエイヌが「わ

あ」と笑顔になった。

「また思い出が増えましたね！」

「えへへ。いつか、スケッチブックが楽しい思い出でいっぱいになる  
といいな〜」

「なりますよ〜！　たくさん思い出作りましょうね！」

「うん！」

「トモエあるじ、イエイヌあるじ〜！　見て見て〜！　新しいクビワ  
〜！」

建物から飛び出してきたクビワペツカリーは、ともえたちの前でく  
るりと回った。白い毛糸で編まれた首輪はピンクの毛糸で縁取られ、  
真ん中にはクビワペツカリーのヘアピンと同じマークが編み込まれ  
ている。

「わー！　可愛いね！」

「でしょでしょー！　ヒツジあるじ、ありがとー！」

「ふふっ、喜んでもらえてよかった！」

建物から出てきたヒツジも安心した顔で笑っていた。ともえたち  
の方に向き直って微笑む。

「二人とも、手伝ってくれてありがとう。おかげでとつてもぷりちー  
な首輪ができたよ。毛糸に色を付けるって、素敵ね」

「クーちゃんもとつても嬉しー！　クビワあったかくてきれーで、ヒ  
ツジあるじとおそろいのもこもこだよー！」

「あはは！　よかったー。あたしも、お手伝いできてよかったよ。煮  
て毛糸に色を付けるのは、火が必要だから難しいかもしれないけど、  
ああいう色の付いた水を用意したらいいって考えると、たぶん煮なく  
ても、色の付いた水を作ったら毛糸にも色が付くと思うんだ」

「そうですね。タデアイの葉っぱも、千切ったらもう青かったですし」  
ともえとイエイヌが言うと、ヒツジが指先を顎にやった。

「あ、それならもしかして、ブドウとか果物を潰してもいいってこと？  
前にクビワペツカリーが体に木の実を付けて汚しちやっただことが  
あったから」

「あー！　ヒツジあるじ、それないしょ！　ないしょにしてー！」

「あはは！　ぐめんぐめん！」

仲良しな二人にともえたちも笑っていると、ヒツジが「あ、そうだった！」とともえを振り返った。

「ねえ、トモエたちは旅をしてるんでしよう？　手伝ってくれたお礼に、プレゼントしたいの」

「プレゼント？」

首を傾げていると、ヒツジは家に戻り、また別の編み物を持ってきた。じゃーん、とヒツジが広げて見せてくれたのは、首や袖口、裾の縁取りに青い糸を使った、白いセーターだった。とても丈が長く、ヒツジの膝までである。

「か、可愛い〜！　これ、本当にもらってもいいの?！」

「もつちろん！　トモエのために作ったんだから！　イエイヌはもこもこしてて寒いところも平気そうだけど、トモエはつるつるしたところが多いから、寒いこともあるだろうと思って。よかったら使ってみてね！」

「ありがとう、ヒツジちゃん！　わーすつごくふかふかしてる〜！」

受け取って肩や首に合わせて体に当ててみると、袖も膝丈の裾もちょうどいい長さだった。イエイヌが感心して言う。

「すごいですね、ヒツジさん。見ただけなのに、ともえさんにぴったりです」

「ふふっ。トモエはつるつるしたところが多いから、これぐらいかな？　って予想しやすかったの。クビワペツカリーは髪をおろしてるし、動き回るから、大きさを掴みにくかったけどね……」

「あ！　それでヒツジあるじ、たまにクーちゃんはぐはぐしてたの？」

仲良し嬉しくてはぐはぐされてたよー」

「そうねーそれもあるかもねー」

「ヒツジあるじ〜？」

「あはは」

セーターは大事にたたんで、ともえのバッグに入れた。荷物をスクーターに戻すと、ヒツジとクビワペツカリーが見送ってくれる。

「二人とも、気を付けてね！」

「またクーちゃんたちと遊んでねー！」

「うん！ ヒツジちゃん、クーちゃん、またね！」

「また遊びましょうね〜！」

「発車するゾ」

二人に大きく手を振って、スクーターは再び走り出した。

### エンディング

(お気に入りの曲をお流しください)

ヒツジは家に戻り、うんと伸びをした。クビワペツカリーは「木の  
実探してくる！ 色がつきそうなの！」と輝くような笑顔で言っ  
て走り出してしまったから、ヒツジは大人しく見送った。彼女の好きに  
させるのが一番だ。

「さーて、次はどんなぶりちーなものを作ろうかな。……うん？」  
籠を見たヒツジは首を傾げた。白い毛糸玉が一つ減っている。ど  
こかに転がっていつてしまったのかと部屋を見て回ったが、どこにも  
なかった。

「変ね……数え間違えてたかな？ えーと、一個、二個……」

毛糸玉を籠から取り出しながら数えていると、がたがたと窓が鳴っ  
た。ヒツジは振り返らないまま言う。

「クビワペツカリー、窓は壊さないでねー？ 風が入ってきて寒い  
から……」

「たっだいまー！」

玄関からクビワペツカリーが飛び込んできた。籠いっぱい色ん  
な木の実を抱えている。

「ヒツジあるじ、見て見てー！ いっぱい集めたよー！」

「あれ？ クビワペツカリー、さつき窓を叩かなかった？」

「叩いてないよー？ ヒツジあるじが元気って知ってるからー」

「そう……？ 気のせいだったのかな」

「あ、それでね！ こっちが赤っぽい木の実で、こっちが黒っぽい木  
の実でー」

クビワペツカリーが見せてくれた籠をヒツジも覗き込み、美味しそうな木の実を見ていたから、気付かなかった。

カーテン越しに、窓の外を人影が横切っていたことには。

『予告茶番』

「あー！」

「ど、どうしましたか、ともえさん！」

「ヒツジちゃん、もふもふさせてもらったらよかったー！」

「もふもふ？」

「だってヒツジちゃん、すっごくもこもこしてたから……もふもふ……」

「うう……わ、私ももふもふしてるので、どうでしょうか……？」

「もふもふ……」

「もふもふ……」

「うううイエイヌちゃんもすっごくもふもふしてるー！ もふもふー！」

「あはは、ともえさん、くすぐったいですー！」

「……それはないものねだりなのかナ、トモエ」

「次回、『R o o t』！ 次はどんなフレンズちゃんと会えるかなあ。楽しみだね、イエイヌちゃん！」

### 第三話 R o o t

草原をスクーターで駆け抜けて進んでいると、だんだん日が傾いてきた。夕焼けに包まれる中を走っているうちに、山が近づいてくる。

「ランボちゃん、このまま山に入るの?」

「山のツーリングコースを進めば、キャンプ地に入るはずだ。今夜はそこで過ごすのがいいだろう」

「はい! キャンプ楽しみだな」

スクーターは順調に走り、山へと入っていった。雨ざらしで古びた立て看板には「しぜんこうえん」と書かれている。

「山なのに、公園?」

「この山を含めて、一定エリアを『自然公園』として開放している。フレンドの生活圈とヒトのキャンプ地を隣接させることで、自然な交流ができることを魅力としたエリアだな。ここは山だが、峡谷、溪流、湖畔と、様々な地形が集まっているのが特徴だ」

「そんなに広い場所なんだね。どんなフレンドちゃんがいるのかなあ……」

#### オープニング

(お気に入りの曲をお流してください)

ランボービーストの運転で山に入ったともえは、しばらくして目の前に広がる光景に言葉を失った。

ツーリング用に整備された道は柵が立てられているが、その向こうは断崖絶壁となっていた。切り立った崖がいくつも連なり、谷を作っている。ツーリング用道路の内側はハイキングコースと森になっているから広々としているが、これがもし崖際を走ることになったら、心臓がいくつあっても足りなかったかもしれない。向かい側の崖はとても高く、どのような地形が広がっているのかは見えなかった。だ

が上下にでこぼことした地形を目で追っていくと、やがて巨大な滝が見える。離れていても音が聞こえるほど立派な滝で、真ん中には虹がかかっていた。

「……ランボちゃん、どこかで停まってもいい？ もつとよく見てみたいの」

「了解。最寄りの休憩所で停車すル」

ツーリング用道路から少し外れて、休憩所で停車した。胸の高さまである柵で囲まれた見晴台に向かい、ともえは歓声を上げる。

「す……つごーい！ 広い！ 高い！ 何これー！」

「大きな岩がたくさん……ここまで大きいと、壁みたいですね」

「ここは峡谷エリアだな。サンドスターによって形成された人工峡谷で、滝の上流に湖畔がある。深い谷になっているから、鳥のフレンズ以外が立ち寄ることは滅多にナイ」

「え？ じゃあここはまだ低い場所なの？」

「そうダ。その証拠に、見ロ」

ランボービーストは見晴台で俯いた。ともえは柵から身を乗り出して崖の下を覗き込み、イエイヌが慌ててともえの背中を引っ掴む。

「ともえさん危ないです!!」

「えへへ、イエイヌちゃんありがとう。ランボちゃん、あれのこと？」

「階段が飛び出してるね」

見晴台からはよく見えなかったが、崖から飛び出した階段は谷底まで続いている様子だった。柵から下りるとイエイヌが安堵の息を吐き、ランボービーストは再びともえを見上げる。

「あれはラツキービーストが谷底へ出るための階段ダ。この辺りが一番低いために設置されている。川などに落としたりした物は谷底に留まることが多いからナ。そういう物が谷底で水をせき止めることがないように、定期的にラツキービーストが点検しているんだ」

「そうなんだ……。ラツキーちゃんって、本当にどこにでもいるんだね」

「常に動き回り、フレンズの居住環境を整え、パーク内エリアを保全する、それがラツキービーストの役目ダ」



「確かにこんなに広がったら、たくさんラッキーちゃんて手分けしてお仕事しなきゃ大変だもんね。忙しいんだなあ……」

「じゃあ、フレンズが毎日自分の好きを優先して生活できるのも、ボスたちのおかげなんですね」

「……あれ？ でもそういうのって、それこそヒトもやってそうじゃない？ なんでラッキーちゃんだけでやってるの？」

ともえが疑問を口にする、イエイヌも首を傾げた。

「確かに、そうですね。ジャパリまんを持ってきてくれるのもボスでしたし、ヒトの姿はともえさん以外に見たことがありませんでしたし……どこかで会えたら、ともえさんの『おとうさん』と『おかあさん』の話聞けるのに」

「イエイヌちゃんが待つてるヒトの話もね！ うーん、パークのことはラッキーちゃんたちにお任せして、別のことをしてるのかなあ……ランボちゃんは知ってる？」

「ヒトの位置情報は記録されていないため、参照できない。ただ、遊園地だけでなく、キャンプ地も多くヒトが利用した場所だ。そこなら誰がいるかもしれない」

「そっか！ じゃあなおさら行ってみなきゃだね！」

雄大な景色は名残惜しいが、キャンプ地から見るとランボービーストが言うので、再びスクーターに乗り込んだ。もうすぐ日が暮れる。茜色の空に覆われた峡谷は、どこか神秘的な雰囲気があった。

こちらキャンプ地、と書かれた看板を見てわくわくしていたともえは、木製の柱で挟まれた入り口からキャンプ地に入り、愕然とした。

野外で料理するために用意された台所や、たくさんベンチとテーブル、何かの建物もそこにはあった。だが、それら全てが、太い樹の根に絡みつかれ、貫かれ、押し潰され、半分以上が飲み込まれてしまっていた。

ヘルメットを外し、荷物を持ってキャンプ地に入る。人の気配どころか、使われた形跡もなかった。

「……何、これ……」

呆然と呟くと、イエイヌも駆け寄ってきた。ヘルメットで乱れた毛

並みをぶるぶると頭を振って整え、不思議そうに辺りを見回している。

「ここが、きゃんぷち、ですか。木と土の匂いだけですね」

「……そうだよね。誰かいたら、イエイヌちゃんが分かるよね」

ランボービーストも黙ってキャンプ地を見回していた。ラツキービーストの姿はない。

「ねえ、ランボちゃん。何が起きてるの？ このキャンプ地で何があつたの？」

「調べてみよう。サンドスターズキャン開始。測定中、測定中、……」

サングラス越しに緑の光が放たれた。一瞬で消えてしまったが、ランボービーストは「測定中」を繰り返して動かない。ともえはどうしたらいいのか分からず立ち尽くしてしまつたが、イエイヌが笑つて言つた。

「ともえさん、少し周りを歩いてみませんか？ 何かあるかもしれないせんし」

「あ……うん、そうだね！ あたしたちがキャンプする場所も決めなきゃ」

ランボービーストから見える位置にいれば、心配もされないだろう。ともえは帽子をかぶりなおして、イエイヌと一緒にキャンプ地を歩き始めた。

木製のベンチやテーブルだけでなく、石や金属を使われている台所や建物まで圧迫し、壁のように続いている木の根は、到底植物とは思えない硬さがあつた。本体の樹はさらに大きいらうと容易に想像できたが、キャンプ地から見える範囲に大木はなかつた。根だけここまで続いていて、本体はさらに奥で育っているのだろうか。

森は深く、鬱蒼としていて、あまり入りたいとは思えない。「うー」ともえは小さく唸って森から離れた。とはいえ、反対側は柵で囲まれた崖だ。その先は高さの異なる崖が段を作り、谷底まで続いている。

「……本当にここ、ヒトが使つてたのかなあ」

「においがしませんし、誰もいなくなつてから長い時間が経っている

「かもしれませんか」

「はあ、と溜息を吐いて、ともえとイエイヌはランボービーストのところまで戻った。ちょうど測定も終わったのか、ランボービーストがともえを見上げる。」

「測定が完了したゾ。このエリアは急激にサンドスターが増加し、地中に根を張っていた樹が吸い上げた結果、地形には大きな変化がなかった代わりに、樹が急成長したようだな」

「サンドスターが急に増えたの……？ よくあることなの？ なんて樹だけがサンドスターを吸い上げたの？」

「よくあることではナイ。何らかの原因で急増したようだが、観測設備がないためこれ以上の分析は不可能だ。樹だけがサンドスターに反応したことも分からないナ」

「そっか……。何があつたんだろうね」

「ともえは思わずイエイヌを振り返った。イエイヌも困った顔で首を傾げる。」

「サンドスターは、風と一緒に飛んでいると鳥のフレンズに聞いたことがありますが……何があつて、樹にぶつかったんでしょうか？」

「風と一緒に……サンドスターが出てくる場所って決まってるの？」

「確か……先生は、以前は特定の山からたまに噴き出していた、と言っていました。でもその山も、えーと、じしん？ とかで崩れてしまつて、今はどこから出ているのか分からない、とも。それを調べるのもかねて、先生はあつちこつちに行つても話していました」

「そうなんだ……なんだろう、やだな。何か怖いことが起こつてないといいんだけど……」

心配になつたが、今は話していても仕方ない。キャンプする場所を決めようと振り返つた瞬間、目の前に赤い鳥の顔があつた。

「きゃあああああああ?!」

「うわあああああああ?!」

思わず叫んでイエイヌにしがみつくと、イエイヌまで大声を上げた。目の前にあつた赤い鳥の顔がくつくつと揺れて、白い羽とともに

顔がずれる。そこに浮かんでいたのは、白い鳥のフレンズだった。飾りが付いてきらきらとした白と紫のコート、そこから白いタイツと茶色のブーツに覆われた脚が伸び、大きな尾羽が揺れている。彼女は目の前に降り立つと、にこやかに言った。

「大丈夫。これはタダのお面さ」

「お、お面？」

「私が作ったんだ。意外とよくできているだろう？」

彼女はお面を腰に引っかけると、未だに体勢を崩したままのともえとイエイヌを支えて立たせた。

「ふふっ、驚かせてしまったね。私はメンフクロウ」

「あ、あはは……あたし、ともえです」

「イエイヌです。……この辺りで暮らしているフレンズさんですか？」

「そうさ。普段は森で過ごしているがね」

メンフクロウはそう言って目を細めた。

「ここに誰かがいるのは珍しくてね。つい見にきてしまった」

「そうなの？ あ、ここってヒトが使ってたって聞いたんだけど……」

「ヒトか。面白い物を教えてくれたことは覚えているけれど、最後にここにヒトが来たのは、いつだったか」

「……そっか」

「ご期待に応えられなかったか。すまなかったね」

「あ、ううん！ ごめん、ありがとう、メンフクロウちゃん」

話を変えるためにも、キャンプを始めることにした。テントに興味を持った彼女に手伝ってもらい、三人がかりでテントを張る。ランボービーストのアドバイスとメンフクロウの手助けもあって、初めてだったがなんとかテントは形になった。メンフクロウが天井に留まっても少し揺れる程度に安定している。

「手伝ってくれてありがとう、メンフクロウちゃん」

「私も珍しいものを作れたから、気にしないでくれ。君たちは、どうして……」

メンフクロウが降り立つと、彼女の二つに結んだ髪が羽と一緒に揺れた。

「あたしたち、遊園地に行きたいんだ。ヒトを探してるの。……でももう夜だから、ここで休もうと思って」

「私はともかく、ともえさんは夜に動くのは危険ですしね」

「ああ、なるほど。君は夜行性じゃないのか。ふふ、それじゃあ仕方ないな。ここは静かだから、いい夜を過ごせるとも」

「メンフクロウさんは、いつもここで過ごしているんですか？」

イエイヌが尋ねると、メンフクロウは「たまにね」と微笑んで崖の方を見やった。夕焼け空はもう遠く、ただ滝の音と枝の擦れる音が聞こえてくる。

「ここは、風が気持ちいいし、開けた場所だから空も広いだろう？ 暑くも、寒くもない。だから、お面作りが行き詰った時なんかにはここに来るんだ。星も綺麗だからさ」

「星？」

「もう少し暗くなった頃に、空を見てごらん。上から降ってきてそうなぐらい、たくさん星が輝いているだろう。本当はその中を飛べたらいいんだが、君たちに羽はないからな」

試しに見上げてみたが、夕焼け空の端に一際明るい星が出ているだけで、あとはよく見えなかった。空が全部夜に覆われたら、もっと星が見えるのだろうか。

「暗くなるのは少し怖いけど、星が見えるのはちょっと楽しみかも」

「ふふ、よかったですね！」

「ふうん？ じゃあ、星を見上げるのがさらに楽しみになるように、トモエにぴったりの星を教えてあげよう」

「え？ なになに？」

軽く身を乗り出すと、メンフクロウは静かにともえの鼻先に人差し指を立てた。

「夜空で、白い川を探してごらん。その川の近くに、君の瞳と同じ赤い星、アンタレスがある。川を挟んだ反対側を探していると、他の星より一際明るい星、アルタイルも見つかるだろう」

「……赤いアンタレスと、明るいアルマイル？ それ、どこかで……」  
「ま、名前は先生から聞いただけで、私もよく知らないがね。けど特にアルマイルという星は、旅をする君にはちょうどいいと、私は思うよ」  
「そうなの？ どうして？」

「見たら分かるとも」

メンフクロウは微笑み、ゆつくりと羽を動かした。彼女の体がふわりと浮かび上がる。

「ゆうえんちは、たくさんのお友達が来る。君たちによい出会いがあることを祈ろう」

「ありがとう、メンフクロウちゃん。……もう行っちゃおうの？ あたしたち、邪魔しちゃうのかな」

「ふふつ、そんなわけがないさ。君たちを見ていたら、新しいお面を思いついたけども。では、いい夜を」

ともえとイエイヌが手を振ると、メンフクロウも手を振って森の方へと飛び去っていった。あんなに大きな羽なのに、羽ばたく音はほとんど聞こえなかった。

「すごい……本当にフクロウって、静かに飛ぶんだね」

「ともえさん、知ってるんですか？」

「えへへ、図鑑で読んだことがあるだけだよ。実際に見たのは初めて。……ここにも、きつとたくさんのお友達がいるんだね」

でも、ヒトはいない。ともえは思わずこぼしそうになった溜息を飲み込んで、ランボービーストに手伝ってもらいながら焚火台を出した。もうすっかり夜になり、周囲は真っ暗だから、持ち歩ける大きさの明かりを点けた。イエイヌが淹れてくれたお茶を飲みながらジャパリまんを食べると、ほっと心が落ち着く気がした。

「イエイヌちゃんのお茶、やっぱり美味しいな。なんか、ほっとしちゃう」

「よかったです！ 私も、一緒に食べるとジャパリまんはもっと美味しくなるんだなって、新しい発見ができました」

「あはは、一緒だね！」

温かいお茶を、もう一口飲む。視線を上げたともえは、はっとして

カップを一度置いた。

「イエイヌちゃん、ランボちゃん、明かりを消してもいい？」

「いいですけど……あ、星ですね！」

「うん！」

明かりを消すと、辺りは本当に真っ暗になってしまった。いや、不思議と明るい。月と星の光が降り注いでくるのだ。仄かに青く染まった世界で、ともえは感嘆の息を吐いた。

見上げた先には、ちりちりと揺れて見えるほどにたくさん溢れそうなほどの星が輝いていた。大小それぞれの星が夜空いっぱいに散りばめられているのだ。メンフクロウが言った「白い川」もある。星の野原の中を、白い帯のような川が流れているように見えるのだ。

星空に手を伸ばした瞬間、まったく別の場所の、違う空を指差す別の指先が一瞬だけ浮かんだ。

『——ほら、あれが北極星。昔の人はあの星を見て、海の真ん中でもあつちが北だつて分かったの』

「ともえさん？」

イエイヌに声をかけられて、ともえは我に返った。心配そうな声のイエイヌにこつりと寄り添う。

「お母さんのこと思い出したの。あたし、お母さんと一緒に星を見たことがあるんだ」

「そうなんですネ！　どんなお話をしたんですか？」

「北極星の話。どんな場所にしても、どんなに季節が変わっても、一つだけほとんど動かない星があるんだって。それが、北極星。あの星を見たら、自分は北を向いているって分かるんだって」

「へえ……どこにいても、いつ見ても変わらない星、なんですね。じゃあそれ以外の星は動くんですか？」

「うん。毎日ゆっくりだけど、ずーっと同じ方向に動いていくから、季節によって見える星が変わるんだって。えっと、赤い星は何の星座なんだっけ……えへへ、ちよつとそれは覚えてないんだけど」

「せいぎう？ えっと、足をそろえて曲げて座る……」

「ああつ正座！ えっとね〜、なんて言ったらいいんだろうなあ」  
ともえは改めて空を見上げた。イエイヌにもよく見えるように手を動かす。

「むかーし、すつごく昔の人もね、こうして星を見てたの。そしたらある人が、『この星を繋げたら、こんな絵に見えるんじゃない？』って言い出したの。それが星座」

「へ〜！ じゃあ、ヒトは昔から、えをかくのが好きだったんですね！」

「あははつ、かもね！ あたしたちみたいに空を見上げながら、あれは動物に見えるねーとか、あれはこの人に見えるねーとか言ってたんだって。分かりやすいように、星に名前を付けた人もいるんだよ。……あたしは全部は覚えてないけど……」

「ふふ、いっぱい星がありますもんね」

「でも、思い出したよ。あれが赤い星、アンタレス。白い川のこっち側にある、一つだけ赤く光ってる星」

ともえが指を差すと、イエイヌはともえに頬を寄せて指先を追いかけている様子だった。

「あ、あれでしょうか？ ともえさんの目と同じ色の星ですね」

「そう！ あはは。それで、アルタイルは、えーと彗星様だから……あった、あそこ！ もう一個大きく光ってる星と、白い川を挟んでる星があるでしょ？ そののね、こっち側」

「おー。目印になる星があると、分かりやすいですね。あれがあるたいる……あつ」

イエイヌが嬉しそうに声を上げた。

「あの、あるたいるっていう星！ 小さい星に挟まれていませんか？」  
言われるままにアルタイルを見上げると、確かに両脇にも星があった。

「ほんとだ……夏の三角形ばかり見てたから、気付かなかったのかな。ふふ、可愛いね」

「メンフクロウさんが言ってたのは、きつとこのことですね！ とも



えさんを真ん中にして、私とボス！ どうですか？」

「あ、あたしがあんなに大きな星でいいのかなあ。でも、えへへ、嬉しい！ ありがとう、イエイヌちゃん」

大きな星に寄り添う小さな星が二つ。本当は大きさが逆だと思うのだけれど、いつも二人が隣にいてくれるのだと思うと、心強かった。隙間風が吹いているみたいに冷たくなっていった胸の内が、急に温かくなる。ともえは小さく笑って、イエイヌにくっついた。

「……イエイヌちゃんが一緒に来てくれて、本当によかったなあ」

「ええ？ ふふっ、旅はまだ始まったばかりですよ？」

「いいのー、そう思ったの！ あははっ」

二人分の笑い声が響くと、ちりちりと星が揺れて見えた。頬に当たるイエイヌの毛並みは、もふもふとしていて温かくて、最初に抱きしめられた時と同じ、不思議な安らぎを感じるものだった。

「……イエイヌちゃん」

もし、本当はもう、どこにもヒトがいなかったら、どうしよう。

ともえは思わず唇を噛んだ。古びた建物、木の根に飲み込まれた施設、ラツキービーストしか動いていないパーク、ずっと一人で過ごしてきたイエイヌ。可能性は最初からあったのに、考えないようにしていた。

もしかしたら、お父さんも、お母さんも、もうどこにもいなくて。ヒトなんて、もうどこにも。

「ともえさん？ どうしました？」

イエイヌの穏やかな声が聞こえた。ともえは我に返り、イエイヌにもたれていた体を起こす。

「ううん、ちよつと寒くなってきたから、そろそろ寝ようかなって！」

「あ、そっか。そうですね、冷えてきた気がします。てんと？ に入りますしうか。風が当たらないだけで、だいぶ暖かいですよ」

「うん、そうだね。えっと、ランボちゃんは」

「俺は外で見張りをしている。安心して眠レ」

「……じゃあ、お願いしようかな。ありがとう、ランボちゃん。おやすみなさい」

「シンジロ。おやすみ、トモエ」

ランボービーストに挨拶して、ともえはイエイヌと一緒にテントに入った。ベッドに比べると固い寝床だが、安心感がある。帽子とりボンを外して枕元に置くと、「ともえさん」とイエイヌが口を開いた。

「なに？ イエイヌちゃん」

「不安ですか？」

単刀直入に聞いてくるイエイヌは、心配そうな顔をしていた。ともえは唇を結び、温かい手を握る。イエイヌが手を握り返してくれたところで、やつと口を開いた。

「……あたし、不安そうだった？」

「なんとなく、そんなにおいがしました」

「……あたしがイエイヌちゃんと一緒に来てっつてお願いしたのに、ごめんね。もし、本当はヒトなんてどこにもいなかったら、つて……考えちゃったの。ヒトが使ってたものはあるのに、ヒトがどこにもいないから……」

「……そうですね。道具も、建物も、たくさん残っているのに、ヒトはいない。どうしてだろうって、私もずつと思っていました。でもね、ともえさん」

ぎゅつと手を握る力が強められて、ともえは思わず顔を上げた。イエイヌが微笑んで言う。

「ともえさんは、私がずつと待っているヒトが、もうどこにもいないって、思いますか？」

「……ううん。思わないよ。だつてお家にあんなに道具が残つてて、お茶も作れたんだもん。それに、あたしは……イエイヌちゃんが待つてるヒトのことが、分からないから。そんなこと言えないよ」

「私もそうです。ともえさんの『おとうさん』と『おかあさん』のこと、私は分かりません。パークにいるのか、いないのかも、分かりません。だから私たち、旅に出たんです。それを知るために、旅に出たんですよ、ともえさん。まずは分かることを増やしていきましょう。今は、それで十分なはずですよ。だつてまだ、旅は始まったばかりなんですから」

「……うん。そうだね。会ったことのあるフレンズちゃんだってまだ少ないし」

「そうです！ だから、ともえさん！」

「えっ、わっ、わー?!」

手を引つ張られたかと思うと、二人並んで寝転んでしまった。驚いてイエイヌを見ると、イエイヌは枕に髪と頬を押し当ててるようになって、ともえに笑いかけた。

「不安になっても、心配になっても、大丈夫、大丈夫です。だってまだ、何も分からないんですから、不安にだってなります！ でも、私がヒトのおいに気付いてもええさんを見つけることができたみたいに、また別の手がかりが見つかることもあるはずです」

「……そうだね。あの時、イエイヌちゃんが探してくれたから、あたし、助かったんだ」

「これからもそうですよ！ もしともえさんが一人で迷子になってしまったら、私が必ず見つけます！」

「えへへ、じゃあもしイエイヌちゃんとはぐれちゃった時は、私が追いかけるね」

「それで、ボスがもし迷子になってしまったら、その時は二人で探しにいきましょう。それが群れ、仲間というものです。ふふ、私もずっと一人だったから、こうして『温かい』を分け合えるのが嬉しい、とも言います！」

はつとして、イエイヌを見た。異なる色の瞳が、優しく細められる。そうだ、ともえよりもずっと、イエイヌは一人で過ごしていたのだ。ともえは切なくなつて、自分が少し恥ずかしくなつて、イエイヌに微笑んだ。

「……あたしも、イエイヌちゃんと『あったかい』を分けっこできて嬉しいよ。イエイヌちゃんのおかげで、不安なこととか、胸の真ん中が冷たくなる感じが、なくなっちゃう気がするの」

「本当ですか？ よかった〜」

「だからあの、あのー、ね……？ 今日もくっついて寝てもいい……？」

「はい、どうぞ〜」

イエイヌは笑って、もふりともえを抱え込んだ。くすぐったいよ、と笑い合って、明かりを落とす。真つ暗な中でくつついてみると、お互いの呼吸する音と、風の音、枝の擦れる音が聞こえてくる。温かくて、柔らかくて、安心する感触に包まれて、ともえは小さく息を吐いた。

不安になるのは、心配になるのは、あたしだけじゃないよね。ずっと一人でいたのはイエイヌちゃんの方なんだから、イエイヌちゃんの方が不安になったり心配になったりすること、あるよね。せつかく一緒にいるのに、あたしだけ、みたいにしているのは、だめだよ。しっかりしなきゃ。イエイヌちゃんが優しいからって、甘えてばかりじゃだめだもん。

アルマイルが二つの星を連れて空を進んでいくように。三人で旅を始めるのだから。

### 【例のBGM】

らつきーびーすと（薪割り担当）

「メンフクロウは、フクロウ目メンフクロウ科の鳥類だね。聴覚と視覚に優れ、ネズミなどの小型哺乳類を捕食する、夜行性の鳥だよ。ハート形の白い顔が仮面をつけているように見えることからメンフクロウと名付けられた、とされているネ。草原や明るい林といった見晴らしのいい場所を好む鳥で、ヒトの家や納屋、崖の穴みたいな隙間で暮らすことがあり、特にヨーロッパでは親しまれている鳥なんだ」

翌朝。天気はよく、乾いた風が吹いていた。今日も滝には虹がかかっている。

「ランボちゃん、おはよう。ずっと見張ってくれてたの?」

「おはよう、トモエ。それが俺の役目だ」

「あはは……ありがとう、おつかれさま」

大きく伸びをして深く空気を吸い込むと、朝のすつきりとした清涼感が全身に満ちていく気がした。二人分の欠伸に気付いて振り返る

と、イエイヌが同じタイミングで口を開けていた。つい顔を見合わせ  
て笑い合う。

「えへへ、欠伸かぶっちゃいましたね」

「ほんとだね。イエイヌちゃんも、昨夜はありがとう」

「よく眠れましたか？」

「うん！ 今日も張り切って進むよー！」

「おー！」

荷物をまとめてキャンプ地から出て、ともえたちは早速スクーター  
でツーリングコースを進んだ。道路沿いの植物は、キャンプ地以降は  
どれもやけに大きく成長しているように見える。

「ランボちゃん、どの植物もサンドスターを吸収して大きくなってる  
のかな」

「その可能性は高いナ。樹と違って、大きく育たなかったから道が塞  
がっていないだけだろう」

「ということ、きやんぷちみたいに道が木の根っこで塞がれている  
場所もあるかもしれないですね」

「そ、そっか、そうだよ。ランボちゃん、この公園って、別の道もあ  
るのかな」

「複数のルートが存在している。シンジロ」

「うん、よろしくね」

景色のいい中を走ると、風が気持ちいい。スクーターは順調に進ん  
でいたが、やがてスピードを緩めることになった。カーブの先を見  
やったともえは思わず声を上げる。

「ランボちゃん、あれ……」

「ああ、迂回した方がいいナ」

カーブの先は、岩壁を貫いて崖まで崩した木の根が露出していた。  
本体の樹は見えなかったが、相当大きな樹であることは感じられる。  
木の根は壁のように道を塞いでしまっていて、スクーターで通るのは  
無理だ。乗り越えるのも難しいだろう。スクーターで一度後退し、別  
の分岐路を進んだ。

「この先は森だナ。植生を考えると、スクーターで抜けることは可能

だろウ」

「本当？ 荷物が大きいから助かるよ」

しばらく道を進んでいると「もりのみち」と書かれた立て札の前を通り過ぎた。もうすぐ森に入るようだ。育ちすぎた樹に邪魔されることもなく、スクーターは順調に走っていく。

やがて目の前に、緑のトンネルが見えてきた。

「うわあ……これが、森？ すごい……ずっとトンネルみたいになつて……」

「道に根っこは出ていませんけど、なんだか枝がとても……わさつとしてますね……」

スクーターは走りやすいが、頭上は枝と葉が重なり合って空は見えなかった。キャンプ地近くの鬱蒼と生い茂った森とはまた違った重厚感がある。だが、通り抜ける風は涼しく、木漏れ日で森の中は明るい。

「とっても綺麗……お散歩しながら歩いてみたいな。ランボちゃん、いい？」

「問題ナイ」

スクーターはランボービーストに任せ、ともえとイエイヌはヘルメットを外してスクーターから降りた。ともえは帽子とバッグをいつも通り身に着けて、イエイヌと一緒に歩き始める。その後ろからゆっくりとスクーターがついてきていた。

「ここの樹は、根っこが出てきたり、大きくなりすぎたりしてないみたいだね。枝がわさっつてしてるけど」

「そういう種類の植物、なんででしょうか。お日様がきらきらしていて、綺麗ですね！」

「うん！ 風も気持ちいいね……。……あれ？」

清涼な空気を満喫していると、前方で何か黒いものが動いていることに気付いた。イエイヌが「あれ」と声を上げて鼻を鳴らす。

「あれは……鳥のフレンズでしょうか」

「本当？ この辺りで暮らしてるフレンズちゃんなのかな……ちよつと、挨拶してみよっか」

「はい！」

驚かせないように近づいていくと、黒い羽をふわふわと揺らした二人が、ぴよんぴよんと跳ねるように木漏れ日の中で踊っていた。大きな黄色の蝶ネクタイと青い三角形のフリルが揺れて可愛らしい。靴もリボンで結んでいて、とても軽やかなステップだった。

「あの、こんにちは！」

ともえが声をかけると、二人ははっとこちらを振り返った。視線を合わせたかと思うと、二人はともえたちの前に並ぶ。風で二人の黒いポンチョが軽やかに揺れた。

「ここまで来るのを待っていたぞ」

「我らはお前たちの到来を知っていたぞ」

「えっ？」

「ワタシはカタカケフウチヨウ」

「アタシはカンザシフウチヨウ」

「我ら闇より深き黒の華！」

「闇夜の偶像『ゴシツクラック』なり！」

「ほあく……」

二人で手を繋ぎ、もう片方の手をぱっと開いてポーズを取る。その拍子に胸元や頭の飾りが揺れた。ともえはパチパチと拍手をする。

「素敵だね〜！ あたし、ともえだよ」

「わ、私は、イエイヌです……」

「……あんまりオドロいてないね」

「……ソウテイとチガったハンノウだったね」

カタカケフウチヨウとカンザシフウチヨウは首を傾げて顔を見合わせた。ともえも首を傾げてしまう。

「あれ……えつと、ごめんね。ここで何してたの？」

「レ……オホン！ 鍛錬であるぞ。この地で日の光を吸収し、我らが黒をより深きものとするのだ」

「そ、それによって我らの魅力はさらに高まり、多くのものを闇へと誘うことが可能となるのだ！」

「へえ〜！」

ともえが素直に頷いていると、イエイヌが苦笑して言った。

「あの、もつと普通にお話できませんか……？」

「……ヘンだった？ コトバもカザったほうがいいってオモったけど」

「クロもキャラもキワめたいのに、ムズカしいの」

「キャラをカザるってタイヘンね」

「ヒカリのハナになりたいだけなの……」

二人は急に肩の力を抜いて、はあ、と溜息を吐いた。ともえは思わず尋ねる。

「あ、あれ？ じゃあ今までの話し方は、えーと、アイドルのため？」

「そうなの。アタシたち、アイドルになりたくて。いつもここでカザるレンシューしてるの」

「でも、ハデでゴクラクなアイドルはホカにもいるから、もつとクロをキワめたいの」

すっかり話し方が変わった二人は、こちらの方が親しみやすい気がした。ともえもほつと気が緩んで続ける。

「そうなんだ……アイドルって、えっと、あたし詳しくないんだけど、みんなの前で歌ったり踊ったりする人たち、で合ってる？」

「そうそう。みんなとつてもキラキラしてた。アタシたちとはチガウカザリ、すつごくキレイだったから」

「ワタシたちもアイドルになったら、もつとキラキラしたヒカリのハナになれるとオモったの。でも……」

カンザシフウチョウとカタカケフウチョウは夢見る顔でそう言うつて、すぐに肩を落とした。

『『ペパプ』はペンギンアイドルで、ダンスもウタもジヨウズ。キャラもみんなチガって、ハナしてるところをミてるだけでもタノしいつて。キョウシユウチホーに行ったコがオシえてくれたの』

『『May超！』はウグイス、コマドリ、オオルリのアイドルで、たくさんのバシヨをマワってウタってるの。おっとりしたウグイスと、ゲンキなコマドリと、クールなオオルリってキャラもはつきりわかれてて』



「だから、アタシたちもトクイなことをして、キラキラしようとオモったの！ でも、みんなよりメダつようにカザるの、とつてもムズかしくって」

「シックでダークなダンスユニット『ゴシツクラック』……まだまだみたいなの」

二人とも難しい顔をしていた。ともえは素直な感想を伝える。

「でも、二人のダンス、とつても素敵だったよ。踊っていると羽がふわって広がってすごく綺麗だし、胸の飾りが光できらきらしてて、すっごく綺麗だった！ カンザシちゃんの髪飾りもふわって動いてて可愛いよね！」

「ほ、ほんと?!」

「うん！ カタカケちゃんも、ぴよんぴよんした動きが軽やかで、すっごく可愛い！」

「え？ よ、よかった……」

「羽が真っ黒なのも特徴だよね。こういう明るい場所だと胸元の飾りがきらきらしてて綺麗だけど、もしかして暗いところからふわって出てきたら、見る人もびっくりして注目しちゃうんじゃないかな……」

「それ、いいかも。オボえておかなくっちゃ」

「クラいところからデテきて、キラキラ……ステキなの」

三人で盛り上がっていると、イエイヌが「あの」と声を上げた。

「そもそも、二人はどうしてここで練習していたんですか？」

「……レンシユウしてるところミられるの、ハズかしいから」

「ここ、あまりフレンズがないから、ちょうどいいとオモったの」「そうなんですか？ こんなに通りやすい道なのに」

イエイヌの言葉を受けて、ともえも辺りを見回した。確かに、木々は綺麗に並んでいるし、道も平らだし、通り抜けるには最適な道だ。だがカタカケフウチョウとカンザシフウチョウは顔を見合わせてから言う。

「ワタシたち、チガウナワバリからきたから、よく知らないの」

「でも、センセーがね。マエにここでセルリアンとタタカって、たくさ

んのフレンズがタべられたって」

「センサーのほかにオボえてるフレンズはほとんどいないけど、なんとなくみんなコワくて、いないの」

「でも、トモエとイエイヌはいる。フタリは、どうしてここに？」

まさかこんなに綺麗な通りでセルリアンとの戦いがあったとは思わず、ともえは一瞬呆然としてしまったが、慌てて答えた。

「遊園地に行きたくて、ここを抜けようと思ったの。他の道は、サンドスターで急に大きくなった樹に塞がれちゃって」

「そっか。トベないコつてタイヘンなんだね」

「いつもトンでるから、キツかなかったの」

「でもユーエンチ？」

「どうしてユーエンチ？」

「ヒトがたくさんいたって聞いて、そこに行ってみただけけど……ヒトについて、何か知ってる？」

ともえが尋ねると、カタカケフウチョウとカンザシフウチョウはそろって首を傾げた。

「そういえば、シらないかも」

「でももしかしたら、オイナリサマならシってるかも」

「オイナリサマ？」

聞き慣れない名前に思わず復唱すると、カタカケフウチョウとカンザシフウチョウが頷いた。

「このパークをマモってくれてるの」

「でも、ナワバリからウゴけないんだって」

「オイナリサマはずっとナワバリにいるっていつてたから、もしかしたらシってるかも」

「アいにいってみる？ アタシたちがアンナイするよ」

「本当？ じゃあ、お願いしようかな……ね、イエイヌちゃん」

「そうですね。何があったのか、気になりますし」

ランボービーストの発言はなかったから、特に問題はないのだろう。ともえたちはカタカケフウチョウとカンザシフウチョウに案内されるまま、森を進んだ。フウチョウたちはぴよんぴよんと跳ねるよ

うにして先導する。

「さつきキョウシユウチホーって言ってたけど、パークって色んなチホーがあるの?」

「あるよ。ここはコドコチホー? っていうの」

「ほんとはホツカイチホー? にチカイチホーだったの」

「え? じゃあ、今は?」

思わず尋ねると、カタカケフウチヨウとカンザシフウチヨウはともえの前を跳ねて回りながら歌うように言った。

「マエに、ヒトとセルリアンのオオきなタタカいがあつたの」

「そのトキに、たくさんミズがきて、ホツカイチホーとハナれちゃったんだって」

「だからイマは、トぶのがトクイなコやオヨぐのがトクイなコぐらいしかいけないの」

「もしかしてヒトもそっちに?」

「ミタことないからそっちに?」

四人で顔を見合わせてしまった。ともえはイエイヌを振り返る。

「イエイヌちゃん、大きな戦い、って覚えてる?」

「いいえ、分かりません。あの『おうち』で待たなきゃ、とずっと思っていたんですが……」

「カタカケちゃんとカンザシちゃんは?」

「知らないの。たぶん、ワスれてしまったの」

「アタシたち、そのタタカいのアトでフレンズになったんだって」

「ホカのコがいていたから、ほんとだとオモうの」

「オシえてあげられなくてごめんね」

「あ、ううん! 気にしないで!」

「タビするトリのコはシってるかも?」

「オイナリサマもシってるかも!」

歌うように喋りながら、カタカケフウチヨウとカンザシフウチヨウが跳ねていく。その背中をしばらく見つめた。

他の地方がある。でもその地方には海を越えることができるフレズしか行けないようだ。何か移動手段があれば、ともえも行けるか

もしれない。こちらの地方にヒトがいる気配がないのは、みんな海の向こうに行ったからだろうか。それならどうして、ともえはあの建物について、イエイヌも近くの家にしたのだろう。ヒトが海の向こうに行ったのなら、海の近くにある建物でもよかったはずなのに。

「ともえさん？」

イエイヌから声をかけられて、はっとともえは顔を上げた。考えごとをしている間に、フウチョウの二人はきやらきやらと笑いながら先で飛び跳ねていて、イエイヌは心配そうにともえを振り返っていた。

「大丈夫ですか？」

「ごめん、大丈夫。……他の場所にヒトがいるなら、どうやって行こうかなって考えてたの」

「そうなんですネ。うーん、私たちは飛べませんし……ボスが海を渡る方法を知っていたらいいんですけど」

イエイヌは背後を振り返った。ともえも視線をやるが、ランボービーストは先程から黙ってスクーターを動かしているだけだ。

「ランボちゃん、どうしたんだろう。静かだよネ」

「カタカケフウチョウさんとカンザシフウチョウさんに遠慮してるんでしょか」

「ヒツジちゃんたちの前では普通に喋ってたのに……」

「おいでよー」

「こっちだよ」

「あ、はーい！ 今行くよー！」

返事をして、ともえとイエイヌは慌ててカタカケフウチョウとカンザシフウチョウに駆け寄った。

【例のBGM】

らつきーびーすと（ごみ拾い担当）

「カタカケフウチョウとカンザシフウチョウは、どちらもスズメ目フウチョウ科の鳥類だね。カタカケフウチョウは背中肩かけ羽を広げると、頭と胸にある青い飾り羽が目と口のようになって大きな顔に見えるのが特徴で、リズムカルに飛び跳ねながら踊るヨ。カンザシフ

ウチヨウは踊る場所を掃除してから踊るところが目撃されているネ。その踊りも、頭の飾り羽を揺らしながら、爪先立ちになる、特徴的なものだヨ。羽全体をスカートのように広げて、胸の黄色と青の飾り羽を目立たせるように背筋を伸ばして踊るんだ。エサが豊富で天敵もあまりいなかった環境から、派手で目立つ雄が好まれ進化したのでは、と言われているヨ」

カタカケフウチョウとカンザシフウチョウの案内で辿り着いたのは、石の門がある場所だった。雑草が生い茂っているが、門の先には石畳が続き、上へと伸びる階段があるのが見える。

その門に立った時、ともえは初めて来た気がしなかった。周りの生い茂った樹や草花にはまったく見覚えがない。しかし、もつと明るい中でここに立っていた気がする。

カタカケフウチョウとカンザシフウチョウは、門を抜けるとくるりとともえたちを振り返った。

「このサキに、オイナリサマがいるの」

「みんなでいったら、きつとヨロコぶの」

「分かった、ありがとう。えっと、ランボちゃんは……あれ？」

ともえが振り返った頃には、ランボービーストはすでにスクーターから降りてともえの隣に佇んでいた。一緒に来るつもりではいるらしい。どうしたんだろうね、とイエイヌと顔を見合わせたが、ランボービーストが何も言わないならばと、そのまま三人で石畳を進んだ。

階段を上がっていくと、古い建物に迎えられた。階段から建物まで真つ直ぐ石畳が続き、両脇には向かい合わせになったキツネの石像がある。右手には水が湧き出る泉があり、木製の屋根があった。

「……………」、神社だ……………」

ともえは思わず呟いた。そうだ、来たことがあるはずだ。両親と一緒にここに来たのだ。確か、パークに来たばかりの頃。確かその時は、お父さんと、お母さんと、ともえ自身、それから

(…………あれ？ あと一人…………)

誰かがいたはずなのに、思い出せなかった。首を傾げていると、強い風が吹き抜けていく。思わず目を閉じると、シャン、と鈴の鳴る音がした。

「いらっしやい」

涼しげな声を聞いて、驚いて顔を上げた。目の前には、髪も服も真っ白なひとが立っている。尖った耳もふさふさとした尻尾も真っ白で、なのに胸元のリボンだけが真っ赤だった。スカートは短く、左の太腿に白い編み紐を結び付けている。彼女は金色の瞳を優しく笑みに細めて、白い手袋に包まれた手を丸めた。

「ヒトの子が来るのは久しぶりですね。稲荷神社に、何かご用ですか？」

「……いなり神社……？」

呆然と復唱すると、カタカケフウチヨウとカンザシフウチヨウが手を挙げた。

「こんにちは、オイナリサマ」

「またきたよ、オイナリサマ」

「はい。いらっしやい、カタカケフウチヨウ、カンザシフウチヨウ」

優しい声で応じた彼女は、ともえたちを見て小首を傾げた。ともえも慌てて頭を下げる。

「は、はじめまして！　ともえです！」

「イエイヌです、こんにちは」

「はい。こんにちは、トモエ、イエイヌ。よく来ましたね」

「オイナリサマさん、あの、えっと」

「あら？　ふふ、緊張しなくていいんですよ。ここはとても静かですから、ゆっくり、深呼吸をして」

「は、はい」

不思議な迫力があって、つい舞い上がってしまった。ともえが深呼吸をしていると、オイナリサマの背後から真っ白なラツキービーストが現れる。耳の先から尻尾まで真っ白だが、胴には赤い紐紐を締め、丸い鈴も着けていた。真っ白なラツキービーストは、ランボービーストと向き合って静かにしている。

「わあ……！ 真つ白なラッキーちゃん、可愛いね！」

「この子は特別なんです。パークにいるフレンズたちに連絡を取れるように、ここにいてもらっているんですよ」

「そうなんだ……じゃあ、オイナリサマさんは、キツネのフレンズちゃんなの？」

「うーん、この体は確かにキツネのフレンズなのですが、私は稲荷信仰に基づくものなので……ふふ、この神社にいる神様の言葉を、パークにいる子たちに伝えるフレンズ、といったところでしょうか」

「言葉を伝えるフレンズ？」

「はい。こんこん、とね」

「こんこん……」

少し難しかったが、キツネにサンドスターが触れて生まれたフレンズなのではなく、もつと違うフレンズということだろうか。えーと、と考えていると、オイナリサマはランボービーストに向かって屈みこむ。

「ランボービースト。以前の約束をまだ実行していたのですね。指定領域での沈黙指示は解除されていますから、発言しても大丈夫ですよ」

「……了解。沈黙を解除すル」

「え？ 約束って……？」

ともえが尋ねると、オイナリサマは立ち上がり、微笑んで建物を手で示した。

「ピトの子、トモエ。私が知っていることを、あなたに伝えましょう。

おいでなさい」

「は、はい……」

「あの、私も一緒にいいですか？」

「もちろんですよ、イエイス。カタカケフウチヨウとカンザシフウチヨウは……好きにさせてあげましょうか」

ふと階段の方を振り返ると、フウチヨウの二人は階段を飛んだり跳ねたりして、真剣にダンスを考えているようだった。練習熱心な二人だ。邪魔しては悪いだろうと微笑ましく見守り、ともえたちはオイナ

リサマに案内されるまま、古い建物へと向かった。

木製の建物はとても古く、独特の匂いがした。階段を椅子代わりにして座ると、オイナリサマは口を開く。

「ここは、稲荷神社です。商売繁盛、福徳開運、食べ物に困らず、みな笑顔でいられるように。そう祈りを込めて、この神社は作られました。そして私は、ヒトたちの信仰や想いに呼ばれ、白狐の姿を取ってこの地に現れたのです。パークにいるヒトとフレンズが笑い合って、平和に過ごすことができるように、その笑顔を守るために。私もフレンズとして」

「……じゃあ、この神社も本当は、たくさんのヒトやフレンズちゃんが来てたんだよね」

「ええ。以前は多くの子たちが来てくれました。お願いごとをしたり、お願いが叶ったからと感謝しに来たり。この社の前で声をかけてくれる子もいましたし、絵馬をくれる子もいました」

「えまっ？」

「ふふ。お願いごとや感謝の言葉を神様に伝えるために、ヒトの子たちが書いた手紙のようなものですよ。以前は、あそこに納めていたんです。神様からもよく見えるように」

すい、とオイナリサマが指差したのは、神社の敷地内でも泉とは反対側にある場所だった。今は雑草に覆われ、そこに何かあったとは思えない状態になっている。

「ヒトが来なくなると、セルリアンに狙われるようになったので、今は大切に隠していますけどね」

「え？ セルリアンって、そういう物も壊しちゃうの？ フレンズちゃんを襲うだけじゃなくて？」

「セルリアンは、サンドスターを狙っているはずでは……？」

ともえとイエイヌが言うと、オイナリサマは空を見上げた。周囲の木々は神社を覆い隠すように枝葉を広げているから、薄い木漏れ日だけしか見えなかった。

「ヒトとフレンズが笑い合う場所、楽しい思い出を作った場所、大切な思いが詰まった物、それらは輝きを持っていました。サンドスターが



反応するような煌めきです。そしてその輝きは、サンドスター・ロウから生まれるセルリアンをも惹きつけました。なぜセルリアンが生まれるのか、それは私たちにも分かりません。けれど、セルリアンがその輝きを、ヒトとフレンズ、彼らが大切に思う物を襲い、壊し、多くの悲劇を生んだことは事実です。ヒトとフレンズが交流を深め、楽しい思い出を増やしていく度に、セルリアンは彼らを襲い、傷つけ、思い出を、輝きを奪っていきました。雨で土が流れるように、風で花が散るように、突如現れては襲いかかる。それが、セルリアンです」

「……じゃあ」

ともえは小さく息を呑んだ。

「カタカケちゃんとカンザンちゃんが言ってた『大きな戦い』が起こったってというのは……キャンプ地とかで、ヒトとフレンズが交流して、楽しく過ごしていたから……?」

「そうです。この自然公園は、ヒトとフレンズが楽しい思い出を作ることができるようにつくられた場所でしたからね。輝きがたくさん集まっていた。そして、セルリアンもそれを目当てに、集まってしまった。特にヒトとフレンズと一緒に何かを作るような場所、キャンプ地には、多くのサンドスター・ロウが集中しました」

オイナリサマは細く溜息を吐くと、淡く微笑んでもええを振り向いた。

「私は、この神社から動くことができません。だから、この土地に集まったサンドスター・ロウがセルリアンになる前に、サンドスターに変換して、樹に吸収してもらおうので精一杯でした。一緒に戦うことはできなかったから……多くのフレンズたちが動物に戻ってしまったけれど……キャンプ地は壊れてしまったけれど……戦いを終わらせるためには、私が彼らを守るためには、それしかなかった……」

「……だから、根っこが大きくなってる樹があつたんだね」

「でもそれも、その場しのぎにしかならなかったんです。大きな戦いを終え、ヒトはさらなる戦いのためにこの地から去ってしまった。ヒトの信仰を拠り所にしていた私たちも、すっかり力が弱まってしまった。……そして、ヒトが去ってしまうと、セルリアンを引き寄せる輝

きもまた、薄れていったんです。ヒトが多く利用していた建物は特に、輝きを失い、サンドスターが離れ、古びてぼろぼろになってしまっただけ。そうになると、セルリアンは襲わなくなるんです」

「……そんな……」

それではまるで、ヒトがセルリアンを呼んでいるようなものだ。ともえが俯くと、イエイヌが慌てた様子で言った。

「で、でも、今でもヒトが使っていたものはたくさん残っていますし、今でもセルリアンが出ることもありますから、ヒトが呼び寄せていたわけではないんですよ。楽しい思い出があったから、輝きがあっただけで」

「はい。ヒトがいなくなった後も、フレンズは生まれていく。自分の好きなものや動物の頃の思い出を大切にしながら暮らしていると、そこに輝きは生まれる。そして、それをセルリアンが襲う。……笑顔を守り、楽しくフレンズたちが暮らすほど、セルリアンはそれに引き寄せられ、壊そうとしてしまうのです。悲しいことですが、その環を止めるほどの力を、私は持っていません。仮にフレンズたちが楽しく暮らすことをやめ、笑顔を禁止したとしても、彼らはサンドスターから生まれた子たちですから、結局はセルリアンに狙われてしまう……」

悲しい循環だ。ともえは自分の顔がくしゃりと歪んでしまうのを止められなかった。セルリアンのことはよく分からない。けれど、出会ったフレンズたちは可愛くていい子たちばかりだった。その子たちが怪我をしてしまうなんてことは、起こらないでほしい。脳裏に、傷だらけになったイエイヌの姿が浮かぶ。あの時、ともえは何もできなかつた。そんなともえに、セルリアンをどうにかする力はないけれど、悔しかった。

「……じゃあ、戦うのが苦手なフレンズちゃんたちは、みんなセルリアンに食べられちゃうの……?」

「戦うのが得意な子と一緒にいることもありますし、フレンズ同士で協力して、セルリアンを倒すことに集中している子もいます。それに、かつてヒトが使っていた建物は丈夫なものが多いですから、それを利用している子もいますね」

「そうなの？……あ、そっか、ヒツジちゃんのおうち……」

家の中で編み物をしていたヒツジを思い出した。あの時はともえにとつては家で暮らすことが普通だったし、イエイヌも家の中で過ごしていたから、あまり考えなかったが、ヒツジにとつてもイエイヌにとつても、家といえればあの形をしているわけではないだろう。それこそ、オオアルマジロのオルマーが「深めの穴を掘って隠れるよ」と言っていたように、動物だった頃の過ごし方をフレンズになっても続けている子がいるのだから。

「輝きを失つても、砂になって崩れてしまうわけではありませんからね。ヒトを身近な存在としていたフレンズほど、ヒトの建物を利用することは多いみたいですよ」

「そうなんだ……イエイヌちゃんも、おうちで待つてたもんね」

「はい！ それが私にとつて、自然というか……そうしなきゃと思っていたことだったので。でも確かに、おうちの中にいたらセルリアンに襲われることもなかったのも、もしかしたら外よりも安全なのかもしれないですね」

「ええ、そうですね。戦いが得意な子は、相手の倒し方を知っている。戦いが苦手な子は、自分の守り方を知っている。だからトモエも、自分のこと、周りのことをよく知るのですよ。それもまた、生きるための知恵なのですから」

「は、はいー」

ともえは思わず背筋を正して返事をした。セルリアンと遭遇した時はイエイヌとランボービースト任せになってしまうのだから、確かに申し訳ない。色々考えないと、思考を結ぼうとしたところで、ともえはオイナリサマを振り返った。

「あの、オイナリサマさん。ヒトは去っていったって言ったけど、それともう、会えないってこと……？ もう、どこにもいないの……？ あたしのお父さんとお母さんも……イエイヌちゃんの、待つてるヒトも……？」

尋ねる声は、自然と小さくなってしまった。オイナリサマは金色の瞳を丸くしたが、すぐに微笑んで、帽子ごしにともえの頭を撫でた。

「ヒトがどこへ行ったのか、私も分かりません。力が弱くなって、知ることが出来る範囲は狭くなってしまうので。しかし、ヒトはここから先……遊園地へ、そしてその先へと、セルリアンを追い払い、フレズたちの安全を守ってくれたことは確かです。彼らは確かに、このパークとフレズを守るために戦い、セルリアンと一緒にここから離れていきました。遊園地から先を知ることが、もう私には難しいですが……」

「……じゃあ、遊園地まで行ったら、また何か分かるかな」

「ええ、きつと。そこにヒトがいなくても、何があったのか知ることができたら、自ずと、ヒトがどこへ向かったのかも分かるでしょう」

「……そっか。ありがとう、オイナリサマさん」

「いいえ。……本当は、直接あなたを『おとうさん』と『おかあさん』のところに連れていくことができればいいんですけど。ごめんなさいね。すっかり力が衰えてしまっ」

しゅん、と耳を伏せるオイナリサマを見て、ともえは慌てて両手を振った。

「そ、そんなことないよ！ 色々教えてくれて、とっても助かったもん！ お父さんたちや、イエイヌちゃんも待ってるヒトのことは心配だけど、このまま調べてみたら、何か分かるかもしれないだし。セルリアンについても、よく知らなかったから。オイナリサマさん、本当にありがとう」

「……どういたしまして。あなたとイエイヌの旅に、幸福がありますように」

オイナリサマは優しく微笑んで、よしよし、ともえとイエイヌの頭を撫でた。嬉しいけれど、少し恥ずかしい。ともえはイエイヌと顔を見合わせて笑ったが、「そうだ」とスケッチブックを取り出した。

「オイナリサマさん、ここで少し、絵を描いてもいい？ とっても綺麗な場所だから、絵に残したいの」

「もちろん、構いませんよ。ゆっくりしてくださいね」

「今日は何をかくんですか？」

「えへへ、できてからのお楽しみ！」

イエイヌが見守る前でスケッチブックを膝に置き、画材を取り出している。ランボービーストも隣にやってきた。ともえは微笑んで迎える。

「ランボちゃん、ラッキーちゃんと話してると思ったよ。もういいの？」

「アア。地形やルートの確認は終わったからナ」

「そっか。……ランボちゃん、ここでは話しちゃだめって約束してたってみたいけど……」

「俺がスリープモードになる前の話だがナ」

画材を取り出していると、ランボービーストは境内の階段で遊んでいるフウチョウ二人を見ながら言った。

「オイナリサマは、パーク内のロボットを通じてヒトとフレレンズにセリアンやサンドスターの状況を伝えていタ。普段は俺たちロボットとオイナリサマの発言を聞き分けることができたヒトやフレレンズたちも、戦っている最中や、セルリアンを追っている時、セルリアンから逃げる時は難しい。だから自然公園のような、セルリアンが多く出没し、オイナリサマからの情報が重要になる地域では、ロボットは自発的に発言しないよう指示されていたンダ」

「そうなの？ うーん、声とか似てないから、大丈夫だと思うのに」

「だがトモエも、『危ない』と言われるのと『伏せろ』と言われるのだと、『伏せろ』と言われる方が分かりやすいだろウ？」

「あ、そう言われてみたら、そうかも。……そういうものなの？」

「一瞬の判断や躊躇が、勝敗を分けることもあるからナ。当時はそれぐらい危険な状況だったということダ」

「……じゃあ、今は大丈夫なんだね」

「アア。……セルリアンが狙うほどの輝きが、もうないとも言うナ」

「……そっか」

それは寂しいことだったが、だからこそカタカケフウチョウとカンザシフウチョウがダンスの練習をできるほど平和な場所になったともいう。ともえの手は止まったが、暗くなる考えは頭を振って追い出して、線を引いた。

ともえがスケッチブックに何か色を付けている姿を見ると、オイナリサマがイエイヌの隣に座った。オイナリサマは微笑んで言う。「あの子は、絵を描くのが好きなんですね」

彼女の視線はともえに向いていた。彼女はランボービーストと話しながら、絵をかいている。イエイヌもともえの横顔を見つめて頷いた。

「はい。私は、えをかく、がよく分からないんですが……でも、楽しい思い出を形にして残すことができ、素敵だと思います」

「ふふ、そうですね。……そういえば、あなたは待っているヒトがいる、とトモエが言っていました」

「そうです。どうして待っているのかは、よく覚えていないんですけどね。せめてどんなヒトだったのか、思い出せたらよかったですけど……」

「仕方ありませんよ。動物だった頃の記憶なら覚えていることもあります。フレンズだった頃の記憶は、あまり思い出せないことが多いですからね」

「……え？」

言っている意味を掴み損ねて、イエイヌはオイナリサマを振り返った。オイナリサマは優しい顔をして、イエイヌを見ている。その眼差しを、いつかも向けられたことがあるような気がした。

「あの、どういう意味ですか？」

「動物からフレンズになった子が、輝きを失って動物に戻り、そしてまたフレンズになった場合、ほとんどの子が記憶を失っているんです。だから、あなたももしかしたら、と思ったんですが。違いましたか？」

「……分かりません」

返事はとても小さな声になってしまった。動物からフレンズになり、輝きを失って動物に戻った個体が、またフレンズになる。決してありえない話ではない。セルリアンに襲われ、捕食されてしまった

ら、そして動物に戻ってから、サンドスターに触れたら、そんな循環も起こってしまう。

でもまさかそんなことが自分の身に起こったとは、欠片も思わなかった。夢にも思わなかった。

「……私、前にオイナリサマに会ったことがあるんですか？ 今の私じゃないフレンズだった頃に？」

「どうでしょう。私も長い時間をこの神社で過ごしましたから、多くのフレンズを迎え、見送りました。その中に、あなたと同じイエイヌがいることもあったでしょう。だから、はつきりと断言することはできません。でも、記憶がない、というフレンズにはそういったこともあるので、もしかしてと思ってお伝えしました」

「……そう、ですか」

落胆したような、安心したような、奇妙な心地になった。動物とフレンズの状態を繰り返しているということは、それだけセルリアンに食べられているということなんだから、そんなことない方がいいに決まっている。けれど、イエイヌには胸騒ぎが残った。もしかしたら、その可能性だってあるかもしれない。だって記憶にないのだから、ないものを否定できないのだから。

イエイヌの不安や心配をよそに、オイナリサマは穏やかに言った。

「でも、これだけは断言できます。あなたにとって、それだけ、そのヒトが大切だったということだけは」

「……え？」

「サンドスターに触れた動物は、生きるために必要なこと以外を忘れてしまいます。楽しかったことも、悲しかったことも、多くのことを。それはフレンズが輝きを失って動物に戻った時も同じです。フレンズの時にどんなに仲良くなっただけの子がいても、動物に戻ると忘れてしまう。姿が変わった時に持っている記憶には限りがあるんです。でも、あなたは『ヒトを待っていること』を覚えている。もしかしたら動物の時から今まで変わらない記憶なのかもしれないね。それだけ大切なヒトを、あなたは待っている」

「……そこまで大切なヒトを忘れてしまおうって、とても、ひどいこと

「じゃありませんか？」

「そんなことはありませんよ。『待っている』、それを覚えていることが大事なのです。少なくともあなたにとっては、それだけで十分だったんです。もしかしたら、あなたの鼻が覚えているかもしれないかもしれませんね」

ふふ、とオイナリサマは笑って、ともえの方に顔を向けた。イエイヌもともえを見やる。真剣にスケッチブックに向かっていている横顔。それを見つめる時間が、イエイヌは案外好きだった。

「……そうだと、嬉しいです」

不安が解消されたわけではない。気になることが増えたただけだ。それでも、イエイヌは今、自分の胸の奥から湧くものを信じたいと思つた。待っているヒトに会いたい。ともえを守りたい。忘れていることを忘れたままにしたくない。そのために、できることをしたい。

風は優しく吹き抜けていく。木漏れ日が揺れ、枝葉が擦れ合う音を聞きながら、イエイヌはずっと、ともえの横顔を見つめていた。



ともえがスケッチブックから顔を上げ、画材を片付けようと息を吐くと、カタカケフウチョウとカンザシフウチョウが興味津々といった様子でスケッチブックを覗き込んでいた。ともえは驚いて仰け反つてしまう。

「うわああ！ み、見てたの?!」

「キラキラしてて、キレーなの」

「これもカザリなの？ イロがイロイロなの」

「えへへ、絵を描いたの。ほら、こつちがカタカケちゃん、こつちがカンザシちゃん！ 青い羽と黄色い羽がとっても綺麗だから、描いてみたかったんだ」

スケッチブックには、階段の上で踊るカタカケフウチョウとカンザシフウチョウ、それを見ているともえやイエイヌ、ランボービースト、



オイナリサマと白いラッキービーストを描いた。記憶を頼りにゴシックラックのポーズを描いてみたが、カタカケフウチヨウとカンザシフウチヨウは、じーつとスケッチブックを見つめて動かない。

「……えっと、ポーズ、間違っちゃったかな……」

「これが、カタカケフウチヨウ……」

「これが、カンザシフウチヨウ……」

二人は小さく呟き、ぽつと頬を赤くした。かと思うと突然ばさつと羽を広げ、青と黄色の飾り羽を木漏れ日に光らせた。ともえの周りをぐるぐると二人で踊り始め、ともえはスケッチブックを抱えたままあわあわと見回す。

「え?! カタカケちゃん?! カンザシちゃん?! どうしたの?!」

「あら? なんだか嬉しいことがあったみたいですね?」

「と、ともえさんく!」

「イエイヌちゃん!」

二人がステップを踏む隙間から手を伸ばしたイエイヌに掴まり、ともえはやつと謎の踊りの輪から飛び出した。オイナリサマが微笑んで見守っている。

「カタカケフウチヨウ、カンザシフウチヨウ。トモエには踊りより言葉で伝えた方がいいみたいですよ」

オイナリサマに声をかけられ、はたと二人は動きを止めた。もじもじと羽を動かしながらともえの方へやってくる。

「エ、ありがとうなの。ワタシ、もっとクロをキワめて、リツパなアイドルになるの」

「エ、ウレしかったの。アタシ、もっとジョウズにカザって、キラキラしたアイドルになるの」

「そのトキは、きつとサイショにトモエにミせるの」

「エのおレイ、というものなの!」

「わあ、そんな、えへへ、ありがとう二人とも。あたし、応援してるね!」

「ふふふ」

「えへへ」

照れ隠しなのか、二人は笑いながらぴよんぴよんと跳ねて、ともえから距離を取ってしまった。オイナリサマもスケッチブックを覗き込んで「あら可愛い」と楽しそうにしているものだから、ともえは振り返る。

「あの、オイナリサマさん。あたし、これとは別に絵を描いたんだけど……もらってくれる？」

「いいんですか？ はい、もちろんですよ」

スケッチブックから千切ってオイナリサマに渡したのは、神社の前に立っている笑顔のオイナリサマと真つ白なラツキービーストの絵だった。石像のキツネや泉、森も描いて、上の方に「ありがとう」とできるだけ丁寧に書いた。

「あの、えま？ の話を思い出して。本当はこういうものじゃないと思うんだけど、オイナリサマさん、たくさんのことを教えてくれたから、あたしも何かお礼がしたくて……」

オイナリサマはきよとんとした顔で絵を受け取ったが、じわじわと頬に笑みを滲ませた。かと思うと、満面の笑顔になる。

「ありがとうございます。素敵なお絵馬ですね。きつと、神様もこれを見たら喜びますよ」

「よかった！ 色々教えてくれてありがとう、オイナリサマさん」

「いいえ。……私こそ、もっとヒトについて知っていたらよかったですけど、ごめんなさいね。でも遊園地に行ったら、きつと何があったか分かるはずですから」

「うん、行ってみる。そこにもフレンズちゃんがいるかもしれないだよ」

「ええ、きつと。楽しい思い出の場所ですからね」

荷物をまとめると、カタカケフウチョウとカンザシフウチョウだけでなく、オイナリサマも見送りに来てくれた。スクーターはランボービーストに任せ、イエイヌと二人でオイナリサマたちに歩み寄る。

「ここに来たら、また会えるかな」

「ええ、私はいつでもここにいますよ」

「ワタシたちもいるよ」

「しばらくレンシユウするからね」

「よかった。じゃあ、また遊ぼうね」

「またアソぶの。イエイヌも」

「はい〜！」

「コンドはイツシヨにオドル？」

「え、えへへ、あたしも練習しなきゃ……」

四人で顔を見合わせて笑っていると、オイナリサマがともえの頭に、正しくは帽子の羽に手を伸ばした。

「オイナリサマさん？」

「私も力は弱くなりましたが、旅の安全をお祈りさせていただきますね」

「は、はい！ よろしくお願いします……」

少しドキドキしながらオイナリサマに任せると、オイナリサマは帽子の羽に触れるようにして、軽くともえの頭に手を乗せた。穏やかな声で言う。

「ヒトの子、トモエ。もしも暗くて寂しいところで立ち止まることがあったとしても、あなたの心にある思い出や温かな気持ち、きつとその背中を押し、光の方へと導きますように。どんな困難があなを襲っても、必ず救いの手が伸ばされますように。あなたの旅が安全であるように、神様にお伝えします」

ふと帽子から手が離れたことに気付いて顔を上げると、オイナリサマは初めて会った時と変わらず穏やかに微笑んでいた。

「では、お気を付けて」

「ありがとう、オイナリサマさん！」

「それでは、行きますね」

「またくるのー」

「またアうのー！」

白と黒という対照的なフレンズに見送られて、ともえたちはその場を後にした。

ともえと、イエイヌと、スクーターに乗ったランボービーストという最初の三人に戻って、ともえは小さく息を吐いた。

「なんだか、すごく長い間この森にいた感じがするね」

「ふふ、そうですね。楽しいフレンズたちでした」

「オイナリサマさんの話は気になるけど……でも、思い出を作っても、作らなくても、セルリアンが来ちゃうなら、楽しい思い出を作りたいって、あたしは思っちゃった。……だめかな」

「いいと思いますよ。もしセルリアンに襲われたら、私とボスで倒しちゃいますから！ たくさん、楽しい思い出を作りましょう。ともえさんのおとうさんとおかあさんが、びつくりするぐらい」

「そうだね！ えへへ、イエイヌちゃんもたくさん思い出作らなくっちゃ。イエイヌちゃんが待つてるヒトもびつくりさせたいもん！」

「もちろんです〜！ ふふ、ともえさんのスケッチブックがあったら、どんなフレンズと会ったか伝えやすいですし、とてもいいですね！」

「本当？ よーし、いっぱい描いちゃお！ あ、でも今度は、イエイヌちゃんを描いてみたいなあ。もふもふした毛並みとか、ちゃんと観察して描いてみたいもん」

「そ、それはちよつと恥ずかしいので〜……」

二人分の笑い声が森の中に響く。その後を、ランボービーストが黙ってスクーターを走らせ、ついていくのだった。

### エンディング

(お気に入りの曲をお流しください)

ああでもない、こうでもない、と言いながらステップを踏む。カタカケフウチヨウの縦の動きとカンザシフウチヨウの横の動きを上手く組み合わせたら、と思っているのだが、なかなか納得できる仕上がりにはならない。

「オドるのはタノしいけど、フタリあわせるのはムズカしいの」

「でも、ジョウズにできたら、トモエはきつとオドロくの！」

「きつとそうなの。でも、イエイヌは？」

「イエイヌはトモエばかりミてたから……トモエよりカザったらミてくれるの？」

「もつとハデにゴクラクに？ でもアオイカザりはゆずれないの」

「アタシもく。やっぱり、オドリとコトバをカザるのがイチバンなの！……うん？」

木々の間から音がした気がして、カンザシフウチョウは振り返った。茂みが揺れている。誰かいるようだ。カタカケフウチョウとカンザシフウチョウは顔を見合わせた。

「トモエとイエイヌ、モドってきたの？」

「もしかしたら、おキヤクさんかも！」

「レンシユウのセイカをミせるときなの」

「おヤクソクのポーズをするの！ ふっふっふ、我ら闇夜に咲く花ゴシツクラック……！」

わくわくと茂みに向かった二人は、練習していたポーズをしようと身構えた。茂みから飛び出してきた相手に向かって、二人とも羽を広げる。だが目の前に現れたものを見て、二人は悲鳴を上げて一目散に逃げ出した。



ともえからもらった絵馬を見つめて、オイナリサマは笑みを深めた。にっこり笑った白狐と、隣にいるラツキービースト。ありがとう、と頑張つて書かれた文字。

「……ヒトの子の成長は、早いですね」

しみじみとしていると、黒い影が二つ境内に飛び込んできた。カタカケフウチョウとカンザシフウチョウだ。オイナリサマは絵をラツキービーストに預けて慌てて駆け寄る。

「ど、どうしたんですか？ 一体何が？」

「オイナリサマ、タイヘンなの！」

「さつきモリに、ヘンなのがいたの！」

がばりと起き上がったカタカケフウチョウとカンザシフウチョウは、真っ青な顔をして羽を膨らませ、涙目で言った。

「ワタシたちとそっくりなセルリアンがいたの！」

「アタシたちとそっくりなカタチをしたの！」

「……そっくりな、セルリアン……？」

「イソいで二けたの、オつてはこなかったの」

「でも、アタシたちとおなじウゴキでトんでいったの！」

思わぬ言葉を聞き、オイナリサマは背筋を冷やした。

フレンズと同じ形を取るセルリアン。それはかつて、多くのヒトがセルリアンと戦っていた時に現れたものだった。

『予告茶番』

「次にゴシツクラックの二人に会うまでに、踊る練習しなくつちやね！」

「踊るってどんな感じなんでしょうか……カタカケフウチョウさんたちはジャンプしていましたね」

「こう、爪先立ちになつて……ぴよんぴよん！」

「ぴよんぴよんっ」

「ぴよんぴよんっ」

「ふふ、ともえさんの髪がぴよこぴよこして可愛いです！」

「えー？ イエイヌちゃんのもふもふがふわふわして可愛いよ！」

「なんだかこうしていると、ともえさんも尻尾があるみたいですね」

「じゃあイエイヌちゃんとおそろいだよ」

「ジツ……」

「もちろんランボちゃんもだよ！」

「あはは、楽しくなってきましたね！　ぴよんぴよんっ」

「えへへ、跳んで、回つて、ジャンプ！」

「……俺も、できるゾ」

「次回、『R a w r』！　次はどんなフレンズちゃんと出会えるのかなあ。楽しみだね、イエイヌちゃん！」